

■ 論 文

アステカ文明の盛衰と遺産（一）

葛 西 崇*

はじめに

アメリカ大陸では今からおよそ500年前まで、先住民インディオの文明が繁栄しインディオたちは豊かに暮らしていた。外の世界から孤立し隔絶されていたアメリカ大陸は、ほかの文明の影響をほとんど受けることがないまま、旧大陸とはまったく異なる独特の高度な文明が築き上げられていた。なかでも、北アメリカ大陸と南アメリカ大陸にはさまれた、中央ラテンアメリカ地域に、かつて栄えた古代文明は、地球上の神秘的な多くの文明の中でも飛び抜けて異彩を放ち、最も謎に満ちたユニークな文明であると言われる。メキシコの中部からコスタリカ北部にかけ中央ラテンアメリカ一帯に広がり点在した、先スペイン期の古代文明領域を「メソアメリカ」と言いあらわしている（図1参照）。南北アメリカ大陸の中間を意味する、このメソアメリカ地域の中で栄華と隆盛を誇った文明の立役者となったのが、都市国家の覇者アステカである。アステカ文明は多くの従属都市を支配し繁栄していた。

「メソアメリカ」とよばれる文化領域の中には、他の異質な文化から絶え間なく影響を受け、それを吸収消化したり拒絶したりを繰り返しながら、独自のユニークな文化を築きあげていったものが多い。アメリカ大陸最古のオルメカ文明は、紀元前1200年頃にメキシコ湾岸地域を中心に文明を発展させていった。文明の母体となったオルメカが遺した遺産は、その後各地の文化と広く接触しマヤ族に、さらにトルテカ族、アステカ族へと受け継がれ結実していった。宗教、建築、暦法、天文学など、マヤの強い影響のもとに、やがてアステカ文明が育ち、花開いていくのである。なかでも紀元1400年～1500年の約100年間は、アステカが洗練された独自の様式を生み出していった黄金時代といえる。アステカ帝国は広大な地域にまたがって、神殿センターを中核とした都市国家の集合体として発展し、活気とエネルギーに満ちあふれた独特の地域文化を繁栄させていった。従って、アステカ文明は2500年以上にもわたる長い文化発展の流れの最後の集大成、ないしは帰結として形成されたところに意味を持っているのである。

こうして文明の最盛期にあったアステカに、大きな歴史のうねりがおそいかかっていたのである。1492年、コロンブスのバハマ諸島サン・サルバドル島到達から始まった大航海時代の、スペイン人によるアメリカ大陸侵略である。コンキスタドーレス（征服者たち）を新大陸に引き寄せたのはエル・ドラード（黄金郷）伝説であった。黄金や財宝に目がくらんだ彼らは一攫千金^{いっかくせんきん}をもくろみ、またたく間にアステカを滅ぼしていく。独創的な発想にあふれたアステカ文明は、なぜわずかなスペイン兵の侵略によってあえなく滅び去ったのか。一方のスペイン人達は、強固な軍隊にどのように立ち向かい、勝利することができたのか。またメキシコ中央高原の覇者^{はしや}となったアステカでは、なぜ数多くの生贄^{いけにえ}を太陽に捧げなければならなかったのか……等々、数多くの謎と疑問が湧いてくる。こうした謎と神秘の中から、ここでは特にアステカ文明の盛衰に着目し、悲劇的で宿命的なアステカの歴史の変遷を中

* 教授 教育学部（美術教育）

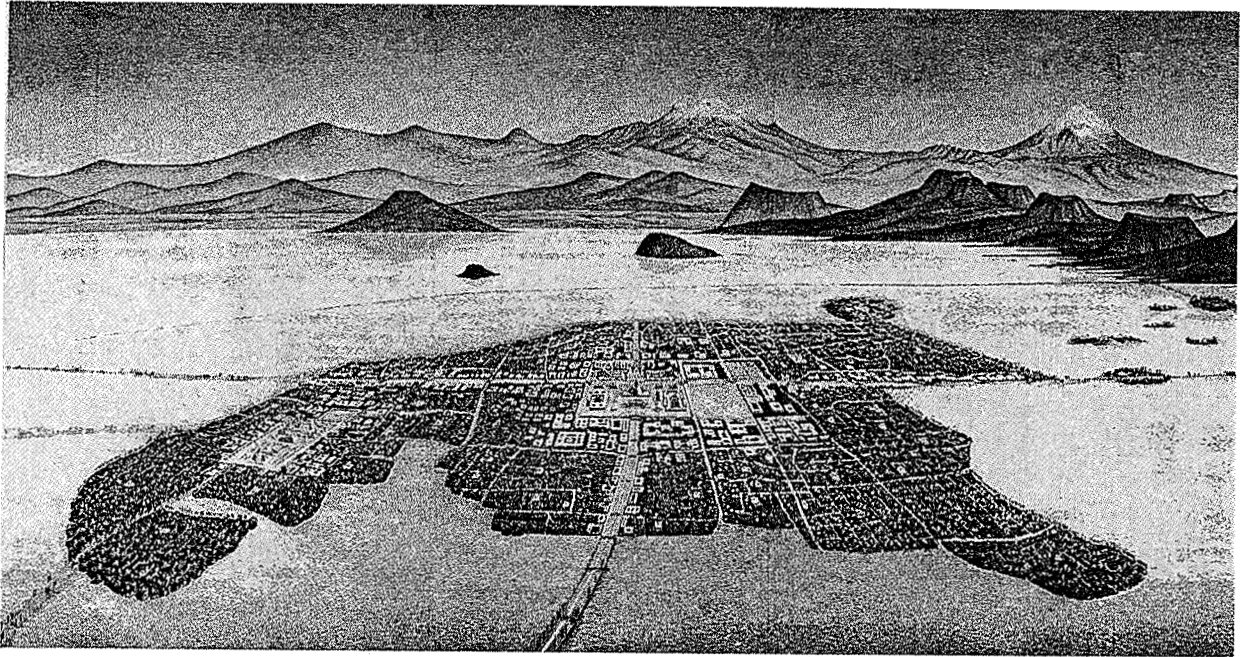


写真1 アステカ帝国の首都テノチティラン^{ふかん}を俯瞰した全貌図。首都はテスココ湖の上に浮かぶ小さな島に築かれ、3本の堤道で結ばれた壮大な大都市であった。

することができるのである⁽¹⁾。

「湖上に浮かぶ町々や、岸边に建ち並ぶ大きな集落を目にし、われわれは道を進んだ。これらの中にひととき大きな神殿があり、その壮大さと立派さは、筆舌につくしがたいほどである。そこには非常に高く、立派に造られた40もの塔がある。それらはすべて石造りで、いちばん主要な塔はセビリヤのカテドラルの塔よりも高い。兵士たちは、それらの光景が“アマディス Amadis de Gaula”の物語に語られた夢幻の世界のものようである、と口々にいった」⁽²⁾。これは、アステカの首都テノチティランに初めてのりこんだ、征服者フェルナンド（エルナン）・コルテス Hernan Cortes (1485 - 1547

図4参照)が書きつづった、スペイン国王カルロス五世への報告書の一部を要約したものである。湖上の島にそそりたつ、大都会の美しさにスペイン人たちは目を見張り、どんなにか驚かされたかその様子をうかがい知ることができる。水の都テノチティランは、海拔2240メートルのメキシコ中央高原の盆地にあった。この一帯は当時、3000平方キロメートル（琵琶湖の約4.5倍）もある大きな湖で、都はその上に浮かぶ小さな島に築かれていた。「サボテンの生えている場所」という意味のテノチティランは、アステカの軍神ウィツィロポチトリの神託にしたがって、1345（または1325）年ごろに建設されたと推定されている。都の人口は推定でおよそ20万～30万人、その規模は当時のローマやロンドンなどの大都市をもしのぐものであった。都へは対岸から湖の中に数キロにもわたる立派な3本の堤道が築かれ、そのうちの北と西にむかって走っている一本には、首都に真水を供給する重要な水道橋がもうけられていた（写真1参照）。壮麗な都は4つの地区に分けられ、町の中心部には大テオカリの名で知られる「聖域」があり、中には高さ45メートルにも達する大ピラミッドが建ち、その上には北側に雨と大地と豊饒の神トラロック Tlaloc、南側に戦争の神で軍事国家の守護神ウィツィロポチトリに捧げられたみごとな大神殿（テンプロ・マヨール）がふたつ祀られていた〔アステカ人はテノチティランの大神殿を東西南北の四方向に向けて建て、これを13層の天界（オメヨカン）と9層の地底世

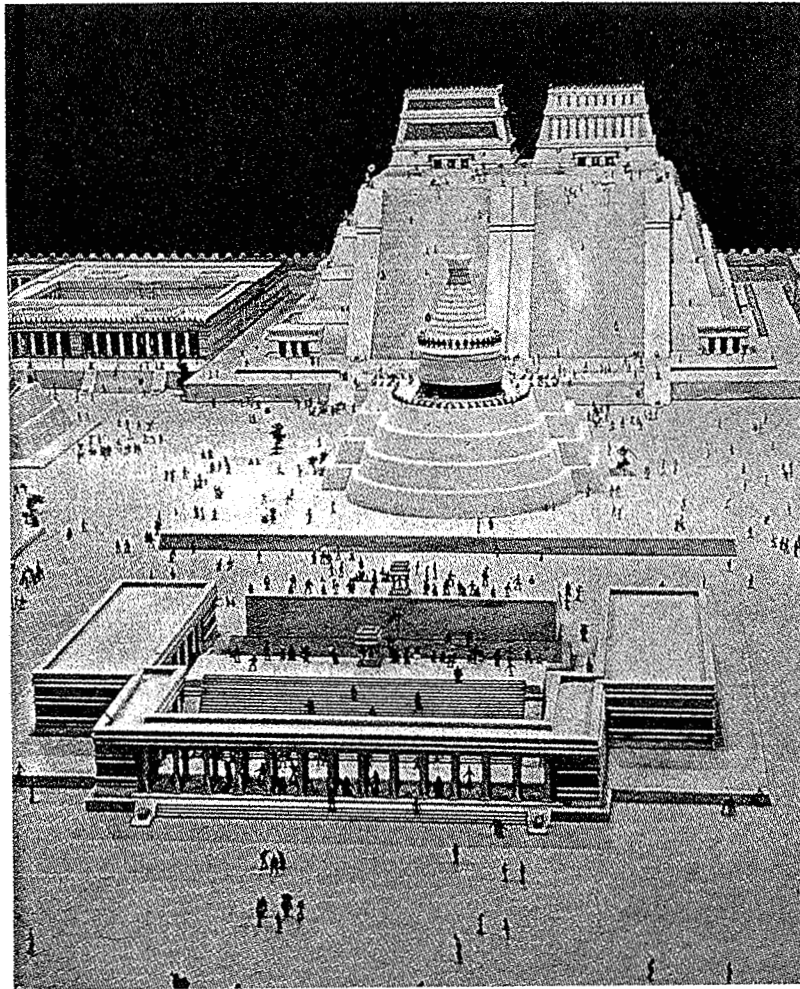


写真2 復元されたアステカ帝国の首都“テノチティトランの大ピラミッド付近の模型”。壮麗な湖上都市は4つの地区に分けられ、町の中心部には、高さ45メートルにも達する大ピラミッドが建ち、その上には北側に雨と大地と豊饒の神トラロック、南側に戦争の神ウィツィロポチトリに捧げられた大神殿がふたつ祀られていた。アステカ人は数多くの神々を信仰していたが、その中で最も深く崇^{あが}めていたのは独自の太陽崇拝の神ウィツィロポチトリである。大ピラミッドをかこむ500メートル四方は大神域とよばれ、神殿や宮殿、祭壇などが整然と建ち並んでいた。

界（ミクトラン）の間の中心点と考え、大神殿の二連ピラミッドは、二つの聖なる山コアテペックとトナカテペトルを表していたのである⁽³⁾。大テオカリの外側には、動物園や植物園が設けられ、珍しい動物や植物がそろっていた。アステカ人は先行の諸文明と共通した数多くの神々を信仰していたが、その中で最も深く崇^{あが}めていたのは独自の太陽崇拝の神ウィツィロポチトリで、この神はコアトリクエ「蛇のスカートをはいた女神」から生まれ真昼の太陽の化身でもあった。しかしウィツィロポチトリ神は夜の暗闇の力に対抗して、夜ごと月と星に果てしのない戦いを挑む宿命を負っていた。大ピラミッドをかこむ500メートル四方は大神域とよばれ、100をこえる神殿や宮殿、祭壇、城^{じょうまい}、貴族や神官の館、商人や工人の住居などが整然と建ち並び、そのまわりをコアテパントリ（蛇の壁）が取り囲んでいたのである（写真2参照）。

476年の西ローマ帝国の滅亡とともに始まる、一般には世界史などで「中世」とよばれる暗黒時代。ヨーロッパは古代の文化も衰えをみせ、民族移動や外敵の侵入などが繰り返され不安の多い封建社会に低迷して全般に活力にとぼしかった。そうしたちょうど同じころ、メソアメリカ地域ではヨーロッ

たとえ対照的に、^{けんらん}絢爛たるマヤ文明が花開き絶頂期を迎えていた。しかしこのマヤも、文明がもっとも成熟し隆盛をきわめた9世紀末から10世紀ごろには、突然謎の滅亡をとげてしまう。人類の多くの歴史の中で、終末を謎で閉ざしたマヤの最期は大きなミステリーの一つでもある。ひとつの高度な文明を突然滅ぼしてしまうほどの、想像を絶するような何かとてつもなくすさまじいことが起こったのであろうか。これまでに数えきれないほど多くの探検家や研究者が、数多くの仮説（地力消耗、土壌流出、疫病、外敵侵入、階級対立、革命、地震、^{ききん}飢饉、ハリケーン、気候激変、草原転化、毒キノコ説など）をたて謎を解き明かそうとしてきた。しかしまだそれらのいずれも、はっきりした証拠によって証明されてはおらず、むしろ謎はいつそう深まるばかりである。ギリシャ文明が、ローマをはじめヨーロッパ世界に強い影響を与えたように、マヤ文明は、おそらくアメリカ大陸におけるギリシャ的存在であったと思われ、メソアメリカのいたるところにマヤ文明の足跡を目にすることができる。だがスペイン人が新大陸に到着した時には、マヤはすでに滅びアステカが最盛期を迎えて繁栄していた。マヤの多くの遺産を受けついで後継者こそアステカだったのである。

1516年にイギリス人のサー・トーマス・モアが『ユートピア Utopia』を出版したころのこと、印刷術の発達で、それまで富裕なごく少数の人だけの独占物だった印刷本を多くの国の人々に提供するようになっていた。ちょうどそうした16世紀の初頭、ヨーロッパの征服者たちが突如侵入してくるまで、アステカの人々はまったく隔離された世界の中で豊かに暮らしていたのである。インディオの閉ざさ

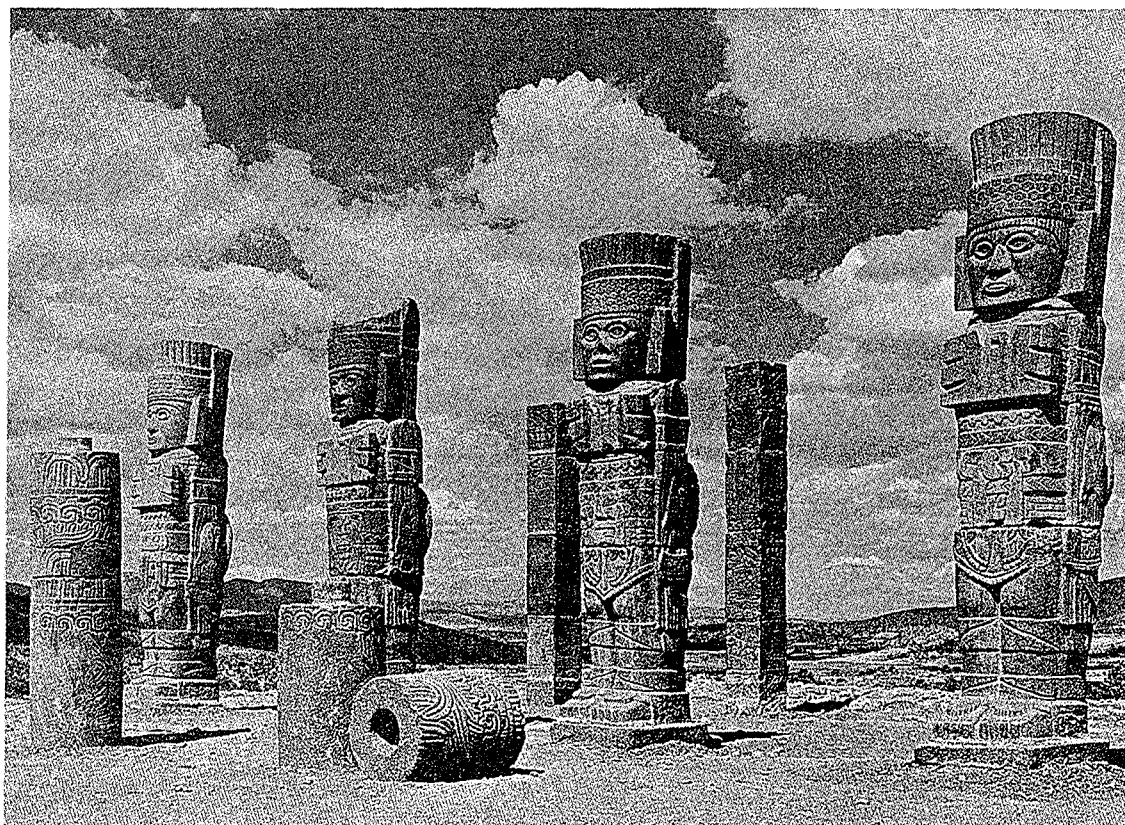


写真3 トゥーラの「軍装に身を固めた戦士の巨石柱像」。トルテカの首都トゥーラのピラミッドBの上に立っている、神殿入口の屋根を支えていた巨大な石柱。羽毛の頭飾りをつけ、右手に槍投げ器、左手に一束の投げ槍を持っている。首に蝶形の胸当てを吊り、帯の後ろには太陽を象徴する円盤状の飾りをつけて革製のサンダルを履いている。堂々とした人像柱は、「ほぞとほぞ穴方式」により、4つの部分が接合されてできている。後古典期前期、高さ4.6メートル、玄武岩。

れた大陸とばかり思っていたメキシコの奥深い未開の地に、突然立派なピラミッドや、まばゆいばかりの大神殿が建ち並ぶ壮大な湖上都市をスペイン人たちが発見したとき、一行の誰もが胆をつぶし驚嘆させられたのも無理はない。旧世界の諸文明とは、なんの接触も持たないアメリカ大陸の孤立地域に、なぜアステカがメキシコの中央高原の覇者となり、壮麗な大文明を築くことができたのか。コルテスたちの驚愕は同時にまた、現代に生きるわれわれの驚きとも共通する。地球上の他の文明にはみられない、強い個性に彩られたアステカ文明。その精神は、崇高さと恐怖の入り混じった芸術作品の中に今も生き続け、底知れない神秘の世界にひきこんでやまないものがある。

2. アステカの伝説と流浪巡歴

1519年、スペインの征服者コルテスたちがメキシコに侵入してきたとき、アステカ族の支配はメキシコ全域に及び、後に「太陽の帝国」と呼ばれるようになった一大帝国を築きあげていた。アステカは国土をメキシコ湾岸のベラクルス地方から太平洋岸のゲレロ地方へ、北は大草原地帯から南はグアテマラへかけた広大な地域へと勢力を伸ばし版図を拡大していた（図2参照）。皇帝モンテスマ Montezumaの名は、領土のすみずみに鳴り響き敬服され、また強く恐れられてもいた。アステカはどのようにして制覇し、こうした強大な帝国になっていくことができたのであろうか。アステカ文明の初期の歴史はいまだに多くの謎に包まれ、アステカ族の始まりもはっきりとはしていない。だが、アステカの源泉は、メキシコに興亡を繰り返した諸文明の中に深く根をすえていることは明らかで、先住のさまざまな民族の文化を短期間に取り入れて集大成していったのである。メキシコ中央高地では、紀元前の時代からテオティワカン Teotihuacan の大文明（写真17参照）が栄え、7世紀から8世紀にかけて滅び、その後の約300年間は文化的衰退と混乱の時代が続いた。9世紀に入ると、北部の半砂漠乾燥地帯から狩猟遊牧民トルテカ族 Toltec が各地を征服しながら南下し、紀元856年トゥーラに都を定めた。テオティワカンの宗教や文化的遺産はトルテカに受け継がれていった。トルテカはきわめて現実的な軍国主義的国家で、広い地域にわたって征服をかさねメキシコ中央高地の覇者となっていった。ケツァルコアトル信仰をもつ彼らは行動力と機動力を持ち、粗暴で大変好戦的であった。それにもかかわらず「名工、芸術家」ないしは「賢者、都市の民」を意味するトルテカ族は、戦士と学芸の魂を結びつけた新しい先進的文化を開いていった。知識にあふれた彼らは、祭祀に重きをおき神官の支配階級が君臨し、医術や天文を学び、ピラミッドや神殿を建てて曆も用いていた（写真3・4・5参照）。人身供儀の残酷でむごい習俗は彼らによって始められ、一般化されていったものと考えられる。やがてトルテカ王国は、内紛や分裂、北方からの蛮族の侵入などに抗しきれず、1168年トゥーラの都は放棄され、紀元1200年ごろに崩壊したとみられる〔しかし、トルテカ族についてのこうしたとらえかたには疑義を唱える学者も多い〕。こうして中央高原地帯の統一的な勢力は崩れ、およそ15世紀初めごろまで小国が乱立する戦国時代の混乱状態が続き、いくつかの部族が覇を競った。北方系蛮族たちの移動の中であって、13世紀後半に、いちばん最後にメキシコ河谷へ到着したのがナワトル語族のメシカ（アステカ）族であった⁽⁴⁾。

アステカ族は、本来はメシカ族と呼ばれる北方の好戦的集団の狩猟部族であった⁽⁵⁾。彼らの発祥の地についてははっきりせず、いまなお論議的となっている。アステカ族自身の記録や『巡歴絵巻』などの伝承によると、1111年に西方の故郷の地アストララン（Aztlán 白鷺の地または白亜の地）を出発し、約100年以上もあちこちの国々をさまよっていたようである。1276年にテクパヨカンで“新しい

火”の儀式を行った後さらに移動を続け、1299年によくチャプルテペックの地に落ち着き、クルワカン族の支配下に入った。そして西暦1345年、どの部族にも帰属していないテスココ湖岸に定着するようになったと伝えている。アステカ族がメキシコ河谷に侵入した時、すでに有力な諸族が根をおろし、最適な土地はすべて先住民によって占領されてしまっていた(図1参照)。伝説によると、アステカ族が狩猟民として北方を流浪していた試練のころ、アステカの軍神であり守護神でもあったウィツィロポチトリが神官の夢の中にあらわれ、「蛇をくわえた鷲がサボテンの上に降り立っている所に居

を定めよ。その土地こそアステカ族が繁栄する約束の地である」というお告げを下したという(この伝説は、今日、メキシコ国旗の図柄として表現され用いられている)。この神の約束した“予言の地”を求めてアステカ族は移動を始め、長い旅の果てに、当時まだ中央高原のメキシコ盆地を広くおおっていたテスココ湖のほとりの沼のような岬にたどりついた。そこで夢のお告げにあった光景を目撃し、この地こそ約束の地と信じて定住したといわれている。



写真4 戦士の石像。ケツアル鳥の羽のついたヘルメットをつけ、右手に槍投げ器、左手に2本の長い槍と、湾曲した刀を持っている。前面にはトルテカ戦士に特有の蝶形の胸飾りを付け、サンダルを履いている。蝶のシンボルには深い意味があり“トルテカ族は戦争で死ぬと蝶に姿を変えて生まれ変わって太陽まで昇り、そこで再び蜂鳥に変身すると信じていた”ことを物語っている。後古典期前期、高さ116センチ、メキシコ国立人類学博物館蔵。



写真5 雨の神“トラロック”の彩色土偶。メキシコ中央高原で最も重要な神は水[雨]の神トラロックである。この土偶は、トラロック Tlaloc の属性である羽毛のマントを羽織り、大きな“眼鏡”と鼻髭をつけたトルテカの神官を表している。後古典期前期、高さ20センチ、メキシコ国立人類学博物館蔵。

3. 太陽への義務こそ信仰の中心

特異なアステカ文化の中で最も注目し値するのはなんとといっても、まったく独自の宇宙観と宗教体系であった。アステカ族にとって、夜と死と悪の恐怖から人類を救ってくれる太陽こそ彼らの信仰の中心であった。アステカの宇宙観によると、世界の創造は現世に先だって何回かの段階的発展の結果つくり出され、四つの異なった太陽を有する宇宙時代を経て、世界はけして不滅ではなかった。常に虚無の暗黒と戦う太陽がその運行を停止し、世界の破滅する日が来ないように、太陽に生きた人間の新鮮な血を与え暗黒の神をとりなし再生させる必要があると信じられていたのである。「トルテカの宗教哲学によれば、太陽は日中星たちと戦い一日の旅に疲れ果てたのち、夜は地下の闇の世界に落ちていく。そして冥界でジャガーの姿に変身し、真っ暗な地面の下を歩き回っていると考えられていた。その太陽の化身でもあるジャガーが、夜の冥界を旅し再び東の空から息を吹き返して雄々と昇ってくるのである。人間を光と熱で守り生かしてくれる、あらゆるものみなもとである太陽を元気づけなければ、夜明けに再び真っ暗闇の冥界から天に昇ってくる保障はない。その唯一の絶対的な手段が、新鮮な人間の生贄^{いけにえ}の血をたくさん捧げることだとされたのである」。トルテカ人の信仰した夜と戦士の神テスカトリポカ *Tezcatlipoca* は、こうした生贄を要求する神であった。人間を生贄として捧げる残酷な行為は、人の血が神々を力づけるものだとする篤い信仰から来たものと考えられる。「力強き神様よ、この生贄を供えたてまつり、この心臓を捧げまつれば、われらに長寿とこの世の福分を授け給え」というマヤの祈りの言葉にも、神々をなだめ力づけるためという考え方が端的に示されており、アステカもそうした恐ろしい宗教を継承していったのである。アステカの人々にとっても、生贄は太陽と神々へ献上する荘厳な儀式であって、けして残酷な行為ではなかったのである (図3参照)。「メキシコの国家は、最下部から最上部に至るまで、見えざるもろもろの力を、できるだけ多くの人間の心臓によって養い、これによって神々の心を鎮^{しづ}めるためにつくられていたといえることができる」⁽⁸⁾。フランシスコ派の修道僧ベルナルディーノ・デ・サアグンが全生涯を捧げて書いた『ヌエバ・エスパーニャ全史』は、メキシコ古代研究史のうえで不可欠の名著であるが、この史料からもわかることは、太陽と月が神々の自己犠牲によって創造され、太陽と月の運行も神々の生贄と努力によって、可能になったという点である。このことから人間もまた神々に対して、生贄を行わねばならないという考えが、アステカ族の間で生まれたのである。血の犠牲こそが、神の生命を維持する貴重な食物であり、神の恩恵によって存在し地上で神々の役割をになっている人間は、神に対してお返しをしなければならない。人間の血こそが宇宙秩序の維持と、人間そのものの存続のために不可欠なのである。アステカ学の権威アルフォンソ・カソは、「アステカ族の人身御供^{ひとみこくう}は神の愛から生まれた行為だと評している」⁽⁹⁾。

精霊の支配する沈黙した夜の闇と死は、世界のどこの未開地域でも、人間の恐怖のまもであった。太陽が地下の闇に落ちていったあとの、真っ暗闇の奥底にある超自然的なものへの怖れや、奇っ怪で不可思議な未知なるものへの強い恐れは、想像以上のものであったと思われ闇と死を畏怖する宗教をこしらえあげていった。宇宙を創り天体の運行を司る神々に気にいられるよう、食べ物や生贄をそなえることによって人間は神様を養い、世界を規則正しく動かしている。もし自分たちがこの義務を少しでも怠れば、全宇宙は消滅してしまうかもしれないのである。そう真剣に考えたアステカ人にとって、人間はあくまでも神々と一緒に世界を創りあげていく宇宙の中心であった。それだけに彼らは神々への勤めに全生活を捧げて精励し、神様が気にいるように敬虔に生きたのである。そして、太陽の化身ウィツィロポトテリが夜の闇と戦い抜けるように、彼が常に強く活力に満ちて勝利し続けるために



図3 アステカの人身供犠の儀式。神々の怒りを鎮め、最後の審判を避けるために太陽の神に捧げられた生贄を、神官は戦士の胸にナイフを突き刺して切り開く。戦士の霊は、血をしたたかせながら天空へ昇ってゆく。神殿の階段の下のところには、その前にすでに殺された犠牲者が、あおむけに倒れている。残酷なこうした光景をスペインの一修道士（フランシスコ・デ・アギラール）が、冷静な目で見て記述している。フィレンツェノ絵文書より。

食物を提供していった。その最も貴重な食物は人間の生命そのものであり、人間の心臓と血液の中にひそむ呪力「貴重な液体」を戦場と聖壇に捧げること⁽¹⁰⁾であった。このように、人間のおこないが悪く、神様に気にいらなければ、いま自分たちが生きているこの世界は滅ぼされてしまうかもしれないという、恐ろしい性格の神を信じきっていたアステカの人々にとって、人身犠牲(human sacrifice)は世界と宇宙を維持していくために、欠かすことのできない絶対不可欠なものだったのである。現代に生きる私たちにとって、人間の心臓を捧げるといふ殺戮行為^{きつりく}はじつに残虐きわまりない気違いじみたものに思われる。『ポポル・ヴフ』の創世神話⁽¹¹⁾にも記されているように、人間は神々を讃え、神々に糧を捧げるための供犠をおこなう存在として創られたものとされている。このことは、マヤとアステカの人々の宗教観や人身犠牲の背景を理解していく上でも大変重要な意味を持っている。人間の運命や世界過程も、複雑きわまりない宇宙の複合的な構造の中で決定づけられ、人間自身も大自然のごく小さなほんの一部にすぎないのである。こうした考え方を徹底させていけば、残酷と思える生

贅の行為は、もはや善悪のヒューマニズムをはるかに越えたところにあるのかもしれない⁽¹²⁾。強いカリスマ性を持った勇猛^{こつたん}豪胆なアステカの支配者＝国王＝皇帝＝領主＝神官は、民衆になり代わってなにより宇宙と地上の秩序を維持していくことに専念し、異常なまでに人身供犠に没頭していった。こうしてアステカの君主（国王）たちは、まず民衆の信仰に基礎をおき、神から授けられ付与された権限により絶大な王権を発揮していったのである。しかし、こうした絶対的なアステカ王もスペインの著述家たちの記述などによると、世襲制ではなく一定の特権階級の人々の間で選挙によって定められ審議決定していった。この選定は投票で決定されるのではなく、全員の意見がある一人に一致するまで協議して決められた（決して父から息子へは承継されなかった）⁽¹³⁾ もののようである。こうして選ばれた王のもとに、最高会議を構成する4人の高官（都市の4大地域を統率する長官）が国王直系の貴族の中から選ばれて補佐し、権力の集中化がはかられていたのである。「アステカ人は、王の任命は神々、特にテスカトリポカ神によって定められるものと解釈し、新しい王も即位の時、神に対して感謝を捧げ、義務に忠実ならんことを誓った」⁽¹⁴⁾

のである。アステカの基本的な社会単位は、一定の祖先から出たと考えられる氏族結合と階級分化がとけあった「カルプーリ（大きな家）」と呼ばれる、血縁によって結ばれた親族的な社会集団であった。こうした土地所有に基礎を置いた経済的、身分的に平等主義的な、独特の社会的組織力を持った地縁・血縁集団ともいえるアステカ族は、太陽に対する神聖な義務として、毎日のように人身御供を捧げつづけた。こうして世界の歴史上例を見ない、無慈悲の支配する暗く血なまぐさい恐怖の文化をつくりあげていったのである。

4. 文物学問の集大成と聖なる生贅

16世紀のはじめ、ヨーロッパ世界に大きな質的变化がおこり、それまで地域ごとに相対的孤立を守って生きていた人間たちが、海の彼方の未知の新世界へ次々と乗り出していった。異なった民族の諸文化と接触し、影響され内的変質によって世界は「近世」という新しい時代に突入しようとしていた。全世界がひとつになる世界システムの形成が、歴史上はじめてあらわれた地理上発見の時代、いわゆる「大航海時代」の幕開けである。

ポルトガル人による不意打ち的なキリスト教の伝来が、日本人の精神生活に一大変革を及ぼしたように、アステカ人もまた、海の彼方から忽然と^{こつぜん}現れた、それまで考えてもみなかった異民族との

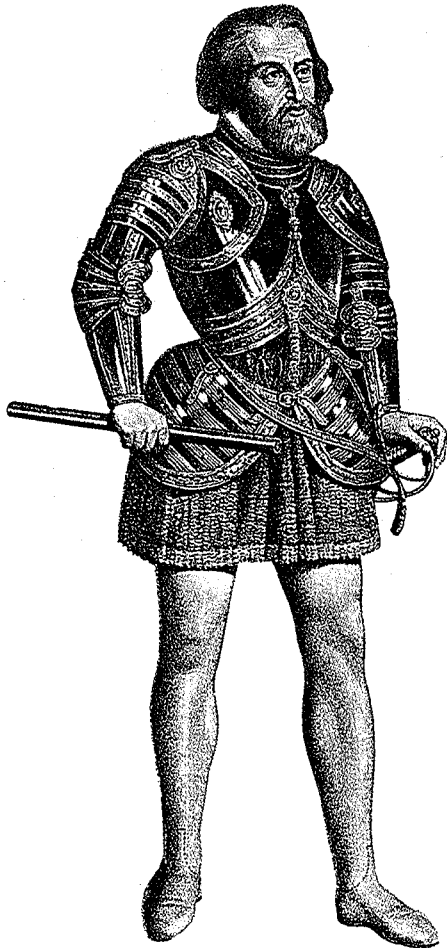


図4 アステカの征服者フェルナンド・コルテス像。
17世紀に描かれた肖像画の一部であるが、作者は不明である。コルテスは豪華で立派なつくりの甲冑をつけ、右手に指揮官の地位を象徴する棒を持っている。コルテスは1483年に、南スペインのメデリンに生まれた下級貴族の子であり、キューバに植民して財産をたくわえていたが、1519年キューバ総督のディエゴ・デ・ベラスケスの命令でメキシコ探検をゆだねられることになった。

遭遇を契機に、多様な異文化とキリスト教の存在を知らされ、アステカ世界は一変していった。野望と熱狂が渦巻く中、真っ向から対立する異なるふたつの文化が激しく衝突し、スペイン人たちによって収奪と搾取のかぎりを尽くされ、ついにはアステカの文明は地上から永遠に抹殺されてしまったのである。約480年前、現実にたしかに生き地球上に存在していた文明について、それを目撃し記録に遺した生き証人たちはたくさんいた。アステカを滅ぼしたスペイン人の中には、略奪や殺戮ばかりではなく、まのあたりにしている文明について冷静に観察をし、客観的な記述をした者も少なからずいた。その人たちが残した数多くの証言の中には、信じがたいほど恐ろしい出来事や、生々しい驚くべき事実が率直に述べられている。これらの記録は、私たちの興味や好奇心を大いにそそり、小説以上のおもしろさを味わうことができるのである。そこで次に、ベルナル・ディアス・デル・カスティーリョとアルブレヒト・デューラーの、アステカの財宝・黄金等への驚きがいかに大きかったか、その様子を少し紹介しておきたい。

1519年11月、メキシコ沿岸のベラクルスに上陸したコルテス（図4参照）はそこで、モンテスマの特派使者から贈物を受け取った。ベルナル・ディアスはそこで起こったすべてのことを目撃者だが、彼は財宝について記録している。「…第一番目は太陽を形どった平円形盤（ディスク）だった。それは馬車の車輪ほどの大きさと純金でできていた。その表面には種々な模様が彫刻され筆舌につくせない素晴らしさだった。もう一つの大きな盤は月を型どり、それは美しく輝く純銀製だった…。次に、精巧な技術で初めて可能となるような二十個のアヒル像。原住民の飼っている犬を形どった装飾品。虎、ライオン、猿の像。精緻を極めた首飾りやペンダント。黄金の冠。ふさふさとした鳥の羽根。緑色の羽根。銀製の冠…金製の鹿の像」

画家であり彫刻家のアルブレヒト・デューラーは、このアステカの財宝が到着した歴史的な瞬間にブリュッセルにいた。そして、これら素晴らしい細工を調べる許可を得たが、このような豪華なものを見たことはなかった、と彼は胆を潰さんばかりに吐露している。これはこの世のものであろうか……これより最高のものを、だれが今まで知っていただろうか。デューラーは鍛冶屋の息子だった。西ハンガリーに居住したのち、生れ故郷のニュールンベルクに戻った。「私はあのような品々をこの目にした」と彼は、ノートに記録している。「それらは新しい黄金の地（メキシコ）から王の許へ届けられたものである。純金の太陽。六フィートはある。同じような純銀の月。彼らの武具。槍や投石器。…それらのすべては素晴らしいとしかいいようがない。……おそらく10万ガルデンの価値はあるだろう。これらを前にして、私の心は感動にうちふるえた。正直いって、このようなものをいままで目にしたことはなかったのだ。私はその技術に仰天し、かの遠く離れた土地の天才たちのことを思う。実際、これらの品々を前にして、私は言葉もない」

メキシコの黄金装飾品の数々は、ヨーロッパに衝撃を与えた。というのも、当時ヨーロッパに金はほとんどなかったのである。大西洋の彼方の原始的な人間ども…それまで耳にしたこともなかったが…は釣り鉤も黄金でつくるほど黄金に埋もれているという事実は、人々に新世界の黄金都市への幻想をかきたてずにはおかなかった⁽¹⁵⁾。

16世紀にはいつてからのアステカ王国の発展と隆盛は破竹の勢いで、かつての北方の野蛮な弱小狩猟部族を、見ちがえるような政治的強者にまで仕立て上げていた。広大な領土の統治者となったアステカには征服地からの貢物や租税としての、ヒスイ、羽毛、織物、カカオなど各地の特産物、食料品など、おびただしい量の富が流れこみ、首都のテノチティトランに集中していった。メキシコ全土の

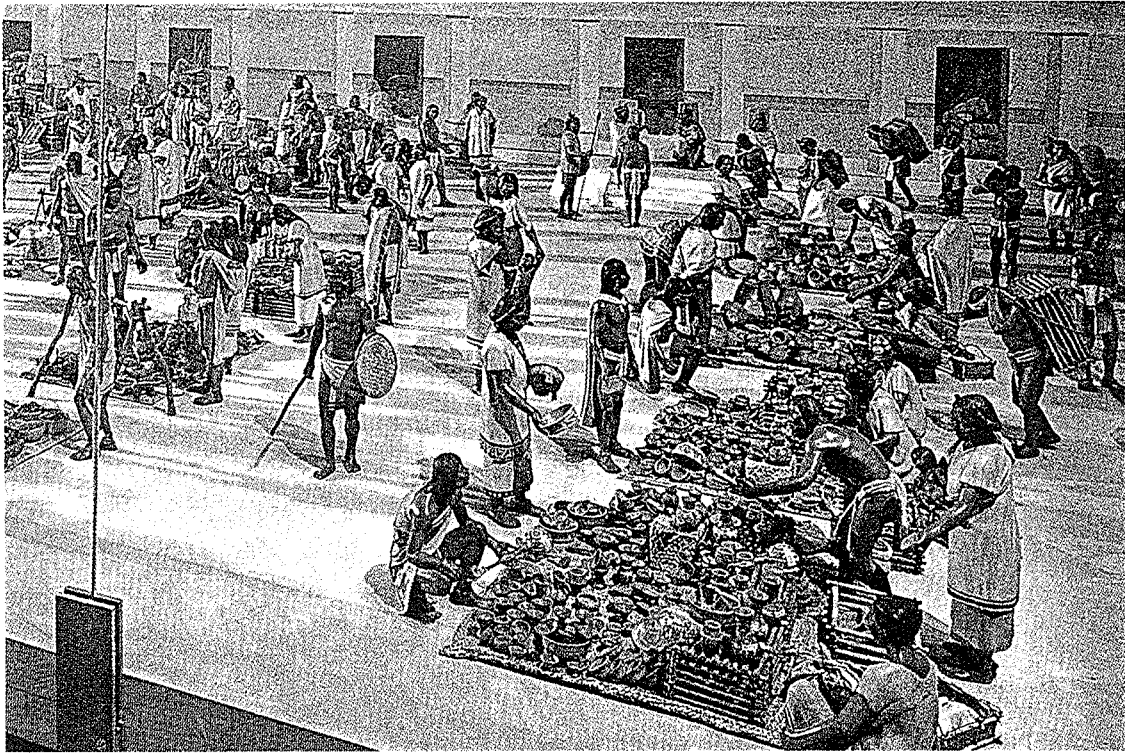


写真6 復元された“トラテロルコの市場”の模型。テノチティトランの北方にはトラテロルコという商業都市があり、ここにも大広場があって、そこではいつも市が開かれ、売り買いの商いがおこなわれていた。この市場には毎日たくさんの人が集まって売買をし、国中のあらゆる土地から採れるあらゆる商品が見いだされるほど大変にぎわっていた。そして、市場には役人がいて秩序は整然と保たれていた。

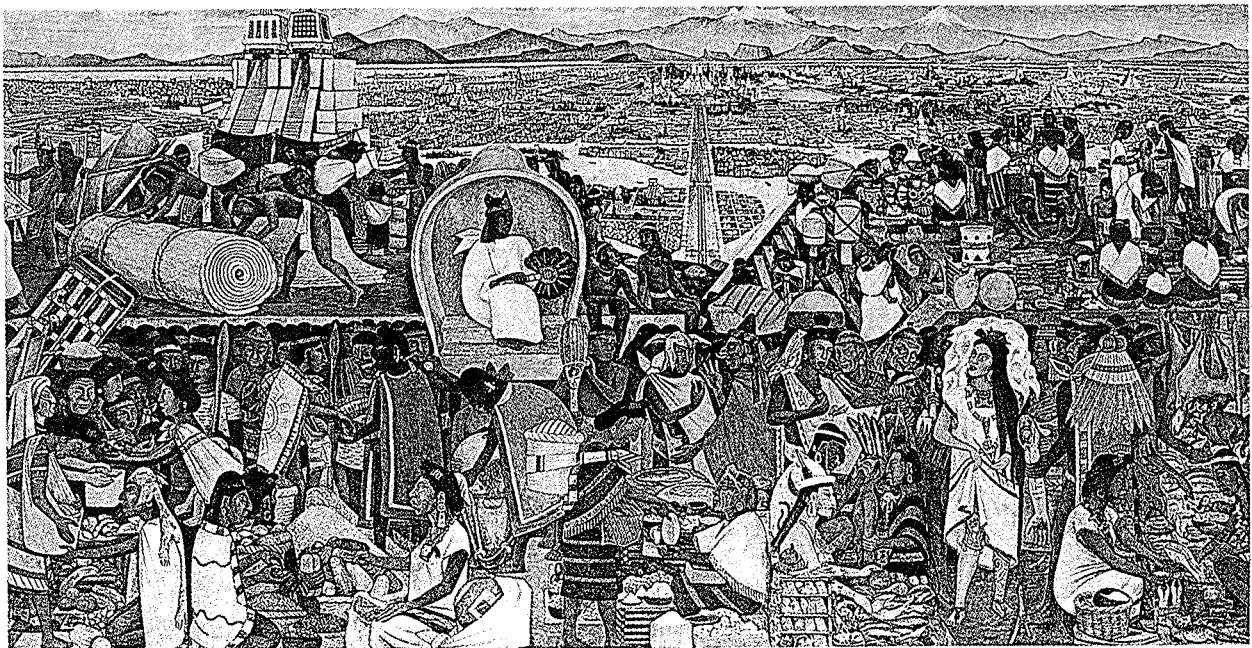


写真7 ディエゴ・リベラが描いた「メキシコの歴史“偉大なテノチティトラン”」の壁画。湖上に繁栄したアステカの首都、テノチティトランと市場のにぎわいが手にとるように描かれている。右の部分に大地の豊饒を司る聖なる女神シロネンが、白い花を光背のようにつけ魔術師達に囲まれて庶民的な姿で立っている。ピラミッドのきざしには、生贄の血が流されアステカの凄惨な宇宙観を物語っている。1935年、フレスコ画、メキシコシティのパラシオ・ナショナル（壁画部分図）。

覇者アステカ族は、軍事的強者であると同時にすでに滅んだ先進民族や征服地のいろいろな文物や学問を積極的に取り入れて集大成し、高い文明を達成した文化人でもあった。自立的な司法と厳格な掟にしたがって、あらゆる面で規律正しく、清潔に維持されていたのが、アステカ社会の特徴である。「この町には多くの広場があって、そこではいつも市が開かれ、売り買いの商いが行われている。なかでもサマランカの広場の2倍もある大広場があり、その四周は柱廊で取り巻かれている。そこには毎日6万以上の人が集まって売り買いをし、国中のすべての商品が見いだされる（写真6参照）。……この町の人々の仕事ぶり、働きぶりを見ていると、スペイン人と同じ生き方をし、秩序整然とした点でも似かよっており、隅々にまで統治が行き届き、立派な暮らしをしていることには賛嘆の念を禁じ得ない。私にはこの町の美しさについて語るべきことの、百分の一も言い表せません」⁽¹⁶⁾。このように、征服者フェルナンド・コルテスは、異教徒が作りあげていた高度な社会体制と、テノチティランの町の大きさと美しさ（写真7参照）に驚きの目を見張り、スペイン国王カルロス五世に書き送っている。

アステカ人はとても清潔好きで、テマスカリという蒸し風呂 sweatbath を持った家が多かった（図5参照）。モンテスマ王は花を大変好み、首都テノチティランの町には、湖底の土砂を積み重ねたチナンパ（浮き島）とよばれる連続耕作が可能な耕地がいたるところに広がり、広大な美しい浮遊庭園・菜園・花園が町の各地にあった。迷路のように入り組んだ庭のあちこちには噴水があって、咲き乱れる花の香りでむせかえるほどだったという。首都の内部はヴェニスのように運河が縦横に走り、移動の大部分は小舟やカヌーによってなされていた。こうして見てくると、テノチティランは、当時のヨーロッパのどの首都にくらべてみても立派で美しく、この世のものとは思われないほど住心地のよ

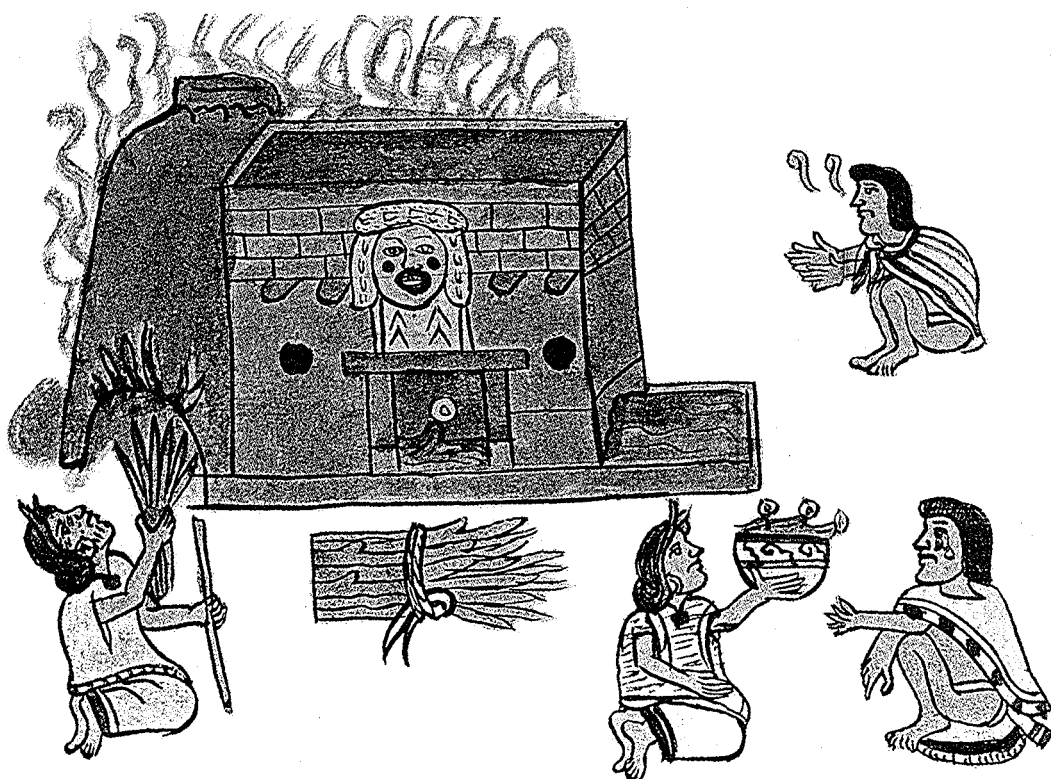


図5 アステカ式の蒸し風呂“テマスカリ”。石造りの小屋で、一方の壁が軽石の壁になっていて、その外（左側）で火をたく構造である。中にはいった者が、熱した壁に水をふりかけて、湯気を立たせる仕組みになっていた。16世紀、マリアベッキアーノ絵文書より。

い場所に思えてくる。しかし、こうした秩序正しく清潔好きな日常生活とはまるで正反対に、首都の神域の大ピラミッドの頂上では「破壊的な宇宙の力や夜の闇と、常に戦いをつづける太陽に栄養を与え活力をとりもどすために、人間の心臓が捧げられなければならない」と信じられ、「美しさ」の裏で、「血染め」の残酷きわまりない生贄の儀式がくりかえし行われていたのである。1487年にウィツィロポチトリとトラロックを祀る大神殿が完成したときにはその記念祭で、一度に2万人もの人間の心臓がくり抜かれて、このふたりの神と太陽のために生贄が捧げられた⁽¹⁷⁾と伝えられている(図3参照)。こうしてピラミッドの石段は鮮血でべっとりと染まり、祭壇の血を乾かさぬために毎朝必ずまた新たな生贄が捧げられた。むせかえるような樹脂香の強烈な臭いに包まれ、血で赤黒く染まったこの神殿ピラミッドこそが、すべてのアステカ族の精神生活の中心でありよりどころでもあった。花にあふれた美しい町と、むごたらしい血まみれの神殿。首都テノチティトランは栄光と恐怖、天国と地獄をないまぜにしたような、世にも不思議な迷宮都市であった。罪もない人間を数多く殺す、あまりにも野蛮な地獄絵図のような光景を目撃したスペイン人たちは、無知と悪魔の迷信に凝り固まった、奇怪で邪悪なアステカの宗教を徹底的に破壊し、キリスト教に改宗させる布教活動に邁進していったのである。今日の私たちからみれば、偏狭で荒唐無稽な途方もないほど恐ろしい宇宙観。だが、アステカ人は、人身御供こそ自分たちがいま生きているこの人間世界を確保し、闇と虚無が世界を呑みこんでしまわないように破壊から救済していく絶対的な唯一の方法であると真剣に信じて行動していた。彼らの宗教的・政治的・社会的・文化的活動のいっさいは、まさにこの聖なる儀式一点だけに向けられてあらゆるものが集中されていたのである。

5. 魂をもり立てる飲み物「チョコレート」

メキシコのヴェニスともいわれ、花にあふれ新鮮な真水をたたえた湖上都市テノチティトランは、このうえなく美しい都だった。青い空と輝く太陽の恵みをうけた首都は一見平和で、さながらこの世の楽園のようであった(写真7参照)。アステカ社会の頂点に君臨する国王=皇帝には、議長を意味するトラトアニ(Tlatoani)という称号があった。王は神の意志を代弁して民衆に告げる神官の役割があり、議会などで立派に話す能力を持った特権階級の代表者であると同時に行政、司法、宗教の最高権力者であり、軍隊の最高総司令長官でもあった。すでに前述してきたように、アステカ国王の権威は神から授けられたものであり、国王には二つの特に重大な任務があった。一つは部族神で闇の神でもあるテスカトリポカ(鏡によって全てを見通す神)と、太陽神であり軍神でもあるウィツィロポチトリを崇拜し、その祭祀を絶やさないこと。もう一つは民衆を善導し、保護する⁽¹⁸⁾責務を負っていたのである。国王の権力は美しく飾った青緑色の衣裳とトルコ石の王冠、宝石類をちりばめたきらびやかな装身具、へびの形をした錫杖^{しやくじょう}などによって象徴されていた(図6参照)。トルコ石の青い輝きは、神々を象徴する神秘の光として、アステカ人は金・銀より大切なものとしてあがめ珍重した。王は宮殿や別邸をたくさん持ち、身分の大変高い大酋長の娘である王妃二人(公式の王妃は一人とする説もある)と、領主達の娘であるたくさんの側妻^{そばめ}と共に贅沢に暮らしていた。モンテスマI世(1440-68年)は王妃や側妻に150人の子供をませたと伝えられている。王宮には、側妻となりえる侍女が常時1000人近くはべり、側近の護衛だけでも200人を超える要人達がいつも別室に控えていた。最後のアステカ王モンテスマII世は、その壮麗な宮殿の中で、3000人の侍従にかしずかれほしいままに権勢を誇っていた。王は毎日、午前と午後の2回必ず入浴し、一度身につけた衣服は二度と手を通さず、家臣



図6 偉大なアステカの皇帝、モンテスマ二世（在位 1502-20 年）の肖像。皇帝は「チョコラトル」とよばれていた褐色の苦い汁をとびきり好んでいたようで、史上最高のチョコレート愛飲者であった。べっこう製のスプーンを添えた黄金のカップで一日に 50 杯も飲み、そのうえハーレムに入る前にも、大きな杯になみなみと注いで飲み干していたといわれる。

のパイプで吸うが、パイプを持って歩くことは貴族的身分をあらわしていた。酒は、今日でいうプルケ（リュウゼツランの醗酵酒）が主なもので、飲むのは主として老人であり、しかも人目に立たないところで、こっそりと飲むのが習わしだった⁽¹⁹⁾。アステカ人は飲酒の弊害をよく心得ていて、泥酔者はきびしく取り締まられ罰せられた。老齢に達すると、すでに社会に対する義務を果たしたからという理由で、プルケを飲んで酔っぱらうことが許され、家族たちも老人をやさしくいたわったのである。

皇帝モンテスマ Montezuma II 世（1467-1520 年 モテケーソマ・ショコヨツイン「榮譽ある若き君主モテケーソマ」の意。在位は 1502-1520 年⁽²⁰⁾）は、カカオでつくった飲み物「チョコラトル」が大好きで、毎食ごとにお代わりして飲んだ。「皇帝はチョコラトル以外の飲み物をとらない。チョコラトルとは、バニラや他のスパイスで香りをつけたチョコレート飲料で、よく泡立てられて蜜のようになっており、口にいれると次第に溶けていく。これは冷たいままで飲む」と歴史家のプレスコットは、アステカのチョコレート飲料の飲み方を書いている。王はこの褐色の苦い汁をとびきり好んでいたようで、黄金のカップで一日に 50 杯も飲み、そのうえ、ハーレムに入る前にも、大きな杯になみ

に下されたという。宮殿には大庭園が付属し、たくさんの鷲、蛇、ジャガーなどを飼う動物園があつて、毎日 5000 羽の七面鳥がそれらの動物の食物として運びこまれていた。王の食事には一食ごとに少ないときで 30 種類をこえるこの国独特の料理が食卓に用意され、モンテスマが口にする料理だけでもその皿の数は 300 枚を超えた。これにトウモロコシ、豆類、トマト、サツマイモ、ピーマン、その他の野菜に肉が加わった。肉の料理だけで毎日、鶏・七面鳥・雉・孔雀・鷲鳥・鷓鴣・鶉・鴨・鹿・豚・鳩・野兎・家兎・水辺に棲む小鳥など実にさまざまな鳥や動物が出され、しかも料理が冷めないように、一皿一皿に土製の小さな炉（コンロ）がついていた。また、この国で採れるあらゆる果物が運ばれチョコレートも供せられた。警護の者やたくさんの使用人達の食事だけで、1000 皿以上もの料理に及び、食器には、主としてチョルーラで造られる赤と黒のミシュテカ Mixtec 系彩文土器が用いられていた。食事にはかなり長い時間がかけられ、踊り子や曲芸師、道化師などが現れて、華やかな歓楽の聲がこだました。祝宴の終りに詩を朗読する習慣は、貴族のあいだでは大いに普及していたという。貴族や商人たちは、よく宴会を開いて朝まで飲み食いし、最後には、手を洗い口をすすぐ水が出されたのち、ココアとタバコがくばられた。タバコは粘土

なみと注いで飲み干していたという(図6参照)。このチョコレトルがエネルギーや力の源となるだけでなく、^{びやく}媚薬や精力剤にもなることを固く信じていたからである。チョコレトルというのは、ショコリ(血の色、つまり生命)とアトル(飲み物)の合成語に由来するショコリアトルから生まれたもので「生命の飲み物」を意味する。この飲み物が現在のチョコレートの原形であり、どのようにして古代メキシコの人々の生活に入ってきたかは、伝説の中にしか見つけることができない。チョコレトルを初めて人類に紹介したのは、羽毛のはえた蛇の形をした神ケツアルコアトルである。水と雨を支配するこの神の根本的な性格は、農耕や文化、学問や宗教上の知識などを地上の人間に教え込むことにあった(写真15、16参照)。恩恵を人類に施す文化神としてのケツアルコアトルは、それまで神々だけの大切な食べ物であったトウモロコシとチョコレトルを、人間に贈り物として与えた。カカオ豆(Theobroma cacao)は、アステカ人にとって人間と自然の接点にたつ非常に重要な産物で、宗教儀式の道具として、また地方の市場では通貨としても使われていた(図7参照)。チョコレトルは、人間の魂をもり立て自分たちの身体を形造るものとして、また、不老不死の靈薬として単なる食物以上の価値が与えられていたのである。最初にチョコレトルに出合ったヨーロッパ人はコロンブスだといわれている。そもそもチョコレートが世界に広まることになったのは、フェルナンド・コルテスが1528年に、カカオ豆とチョコレトルの製造法を初めてスペインに持ち帰ったからなのである。コルテスとお供の部下たち一行は、皇帝モンテスマの壮麗な宮殿に招かれ、最も贅沢なもてなしの一つとして、チョコレトルをご馳走になったのである。モンテスマは歓迎するに際し、チョコレトルで乾杯しその製造過程の見学も許している。スペイン人は、そのもてなし方・接待の素晴らしさを初めて経験し、アステカ人の調合した冷たくて濃い、苦みとスパイスのきいた浮きかすのある飲み物に強く心を奪われた。この苦い飲み物は、コルテスがスペインに持ち帰った当初、あまり歓迎されなかった。だがのちに、これに砂糖が加えられるようになってから、チョコレートとして広く人々に愛好されるようになっていった。スペイン人はその栽培技術と製造法が外部に洩れるのを極力防いでいたが、結局はこの独占権も1606年に破られ、イタリアに紹介されてからは次々と各国に広まっていった。そしてイギリスでこの飲み物に初めてミルクが加えられ1763年までには、チョコレートは一般大衆の間で大変な人気を得ていったのである(21)。

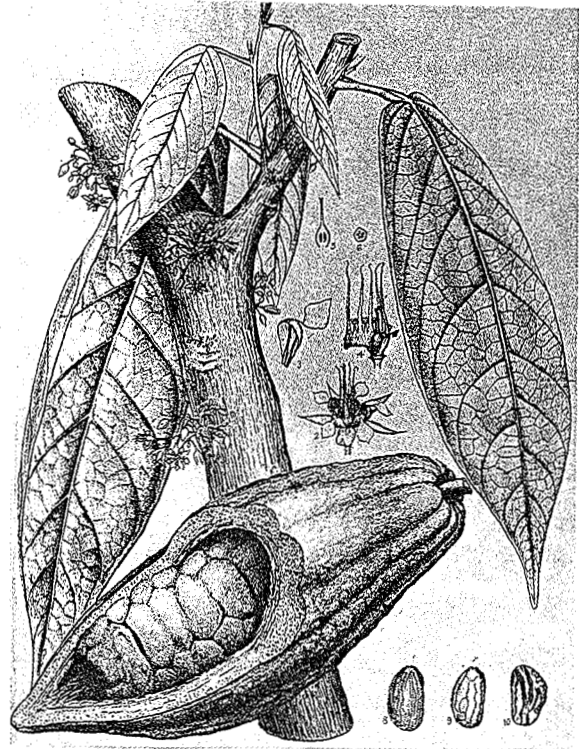


図7 カカオの木“神々の食物の木”を詳細に描いたイギリスの植物図鑑。カカオの木は、正しく“薬効のある木”と分類されている。カカオの莢の果肉に包まれた種子は、発酵と乾燥の過程を経て、いわゆる「カカオ・ニブ」となる。それを焙煎してすり潰せば、チョコレートの原液ができあがる。

6. 暗黒の宇宙へ素朴な恐れ

「毎日、未明にピラミッド上のウィツィロポチトリとトラロック神殿に生贄^{いけにえ}の心臓を捧げなければ沈んだ太陽は東の空に昇りきらない! 夜はけして明けることはないのだ」と信じていたアステカの人々。過去の時代において、太陽はすでに4度も滅びていた。そしていま、世界を照らしている第5の太陽の時代も、大地震によって滅びるという宿命から逃れることはできない。アステカの人々の心の奥には、超自然の力と宇宙への素朴な恐れが生きていた。宇宙は停滞することなく常に運動し進化する。これがアステカ人の根本的な信念であり、宿命的な滅亡の日の存在を信じて疑わなかった。アステカの暦では、現在の100年で1世紀に相当するものは、52年を1周期としており、やがてこの周期が訪れたときに、宇宙は永遠の闇に没してしまうかもしれないという強い不安^{おび}に怯えきっていたのである。「…太陽は夜の闇の中の無数の星と戦っている。その星の数のようにたくさんの捕虜を戦争でつかまえて、生贄に捧げなくてはならない。一人ひとりの捕虜がひとつひとつの星を意味する。破壊的な宇宙の力ときわどい戦いをつづける太陽に栄養を与え、人間世界の生存を確保するために、生贄はピラミッドの頂上で虐殺され、どくどくと流れるその血や生身から取り出された心臓が、太陽に捧げられなければならない」⁽²²⁾。アステカ人はこうした恐ろしい宇宙観を持ち、組織的で大規模な集団殺戮^{まつりく}を実行に移していったのである。生贄^{いけにえ}は、青く塗られた石の祭壇の上に仰向けに寝かされ、4人の長老が手足をしっかりと押さえる。そして反りかえった胸の肋骨の間を、執行者の神官が黒曜石の小刀ですばやく切り開き「すぐさま手その中に突き入れ、荒れ狂うトラの如く心臓をつかみ、まだ脈拍打つまま引きちぎって、皿に載せ、神官に渡す」彼はうやうやしく、心臓ごとその新鮮な生き血を偶像の顔面に塗り付けて清めるのである。このように、毎日毎日生贄を捧げ生命と引きかえにしなければ太陽は昇らない、といった脅迫観念と没落への恐れ。古代アメリカの三大文明といわれるマヤ、アステカ、インカのそれぞれに独特な文明のなかでも、アステカは残忍な生贄を行う特異な宗教観を持っていたという点でも特別な地位を占めている。高度な建築技術や彫刻、絵画といった造形芸術もさることながら、天文学、暦算術、絵(象形)文字など知的分野において、アステカ民族は素晴らしい天分を発揮し、諸部族の中でもとりわけマヤ族の思想と宗教観を受け継いでいった。過去に起こった事件やいろいろな出来事は、いつの日か必ず再来し、凶事は繰り返される。日々、刻々と移り変わる時の流れは、世界の創造と破滅を司る神々の、超自然的な偉大な能力のあらわれと彼らには映っていたのである。アステカの人々にとって神をなだめ、さまざまな儀式をおこない神々の意志をさぐる。時の移り変わりを詳しく観察し、時間を厳密にとらえ、日、月、年の吉凶を占って正確な暦を作ることが、必要不可欠の大切な仕事だったのである。「宇宙の均衡を支えて行く」ためにも、アステカ人は日々、天体に眼を凝らし、注意ぶかく星の動きを観察し続けた。このようなペシミスティックな宿命論に凝り固まった伝承社会においては、神秘的な呪術^{じゆじゆつ}や魔術を自由自在にあやつり、特別な神通力を宿した予言者や神官の、地位と身分はきわめて高いものであった。

アステカ人はマヤをはじめメキシコの諸文化と同じように、365日の長い暦(シウイトルと呼ぶ太陽暦)と、260日の短い暦(トナルポワリと呼ぶ祭儀暦)を用いていた。この最も重要な二つの暦は、52年の周期(365日と260日の最小公倍数の18980日目)で一致したため、アステカ人は周期の完結する日に特別の意味をもたせて重要視した。52年ごとにめぐってくる不吉な年には「新しい火の祭り」が厳粛に執り行われた。暦の上でその大災厄の52年の区切りが終わる日の夜がやってくると、アステカ人たちは世界の終わりが来るのではないかと、震えおののきながら息をひそめて運命の星の動きに目

を凝らした。首都テノチティランと国中の火が消され、人々は断食をし神官たちのあとについて、都の南方のとある山の上に築かれた神殿まで沈黙を守って行列した。そしてそこに着くと、牡牛座のアルデバラン星（またはスバル星）が、天空の真ん中を通過するのを夜半までじっと見守り続けた。もし星の運行が止まってしまうと、太陽は力を失って翌朝はもう昇らず、星が多くの猛獣となって地上に降ってきて人間を食いつくし、世界は滅亡すると考えられていたのである。何事もなくアルデバラン星が順調に空の中央を横切ると、それで世界は終わらず、新しい世紀が始まり、太陽が翌朝ふたたび昇って、星と戦うのだ、と考えられていた。幸い何事もなく星が通過すると、人々は安堵の胸をなでおろし喜びの声をあげて神殿に新しい火をともした。火はそこから各地区の神殿という神殿に、さらに人びとはそこから火をもらって自分の家のかまどに火を移して、人間の無事と新しい世紀（シウモルピリ）の門出を祝いあった⁽²³⁾。そして神官たちは、天体の星神を崇め、ふたたび昇ってくる太陽に活力を与えるため、生贄の心臓をえぐり出して神に捧げたのである。

7. アステカの石彫芸術と職人

メソアメリカの歴史を研究する上でもっとも重要な遺物が1790年に、メキシコ市の中央部にあるソカロ（憲法広場）の改修作業中に地底から発見された。それは、アステカ人の思想と芸術の極致をなす二つの石の大彫刻であった。一つは直径3.6メートル、重さ24トンの巨大な円形の石盤「太陽の暦石」、もう一つは高さ2.6メートル、重さ16.5トンの「コアトリクエ像 Coatlicue」である。前者の「太陽の暦石」には、円盤の中央に太陽の神であるトナティウが、ナイフの形をした舌をたらし疲れたような人間の顔として表現され、血に飢えて人間の血と心臓を要求していることを示している。その太陽の顔をとりまく4つの四角形には、それぞれ過去の4つの死滅した太陽の時代が表されている。さらにその周りには各種の暦表記や、アステカの宗教や神話を明らかにする絵文字と記号が、びっしりとちりばめられているが、いまだに完全に解読されてはいない（写真8参照）。太陽の民族アステカの宇宙観と世界観を円盤の中に集約したこの太陽の暦石は、まさに太陽の帝国アステカ文明のシンボルともいえる。技術の粋をつくした巨大石彫の傑作であると同時に、アステカ人の創造神話と生贄の思想、暦の周期などをすべて要約した偉大な記念碑でもある。

後者の「コアトリクエ像」は別名「蛇のスカートをはいた女神」と呼ばれ、母なる大地の女神であり、この像にその日が予言された通り恐怖の原型でもあった。また、コアトリクエはさまざまな属性をそなえ、生と死をつかさどる神であり、天上と地上の神および人間の創造神でもあった。この女神は、手足にジャガーとワシの鋭い爪をはやした怪獣が、両手を正面に向けて広げている姿で表現され、頭部は二匹の蛇が向かい合っている。胴から膝にかけては双方がからみあった蛇の模様のスカートをはき、胸の上には死の象徴の頭蓋骨と生贄の象徴の心臓と掌の胸飾りをつけている。この精緻で力強い構築的な彫像には、戦慄をおぼえるほどの深い象徴性が秘められている（写真9参照）。蛇で象徴される繁殖力と、生命の復活に必要な生贄の死という両極が示され、宗教芸術における最高傑作の一つと見なされている。このように蛇は、メキシコの美術史を通してさまざまに表現されたが、もっとも卓越した造形はアステカで造られた。アステカの多くの蛇の彫像は、私たちがふだん見ることのない体の裏側まで彫刻され、蛇の持つ神秘的な生命力をことごとく石の彫刻の中に封じ込め、見る者を威圧し衝撃的感動を呼び起こしてくれる。蛇はウロコがあるのに魚ではなく、地をはいながらも足がない。こうした不思議な二面性がアステカ人に神を想像させ、重々しい中にも動きのある精妙なリアリ

ズムで独特の芸術分野を創造していったのである（写真10・11参照）。

アステカの芸術を一般に、メキシコ古代美術の単なる模倣とか亜流と見なすのは正しい見方ではない。硬い岩石に刻まれたアステカの石彫類は、生贄の血によって支配された宇宙観と神学観を力強く簡潔に表し、まさに宗教的な恐怖感の極致に達している。アステカのテーマは、絵（象形）文字、暦数、神々、神話伝説、戦闘、神官司祭、呪術師、奴隷、動物、植物、鳥、魚、鱈…などと実に多彩である。アステカの造形芸術にはマヤ芸術ほどの華麗さはないにしても、神々に取材した怪奇異常なもの、生贄の神事、歴史的な事件と関連した記念的石彫、そして、日常生活を反映した人間や動物、金・銀細工・羽毛製品など（写真12参照）モチーフはじつにバラエティーに富み、強烈な写実性と象徴性が見事に結びついた洗練されたものが数多い（写真13・14参照）。アステカの彫刻家たちは、ただひと



写真8 アステカの“太陽の暦石”。太陽の民族アステカの宇宙観と世界観のほとんど全てを円盤の中に集約した記念物で、アステカ文化の特長を最もよく表したシンボルともいえる浮彫り石彫。中央の太陽の神トナティウが疲れた顔をしてナイフのような舌をたらし、人間の血と心臓を要求している。そのまわりにはアステカの創造神話や暦の周期などを表した絵文字・記号がびっしりと配置され刻まれている。後古典期後期、直径3.6メートル、重さ24トン、1790年メキシコ市中央広場より出土。

つの目的のために汗水を流して打ち込み、ひたすら石に没頭していったことだろう。驚くべき執着力と集中力と忍耐力で、膨大な時間とエネルギーを注ぎ込みながら、アステカ族は世界にまったく類例をみないユニークな傑出した装飾芸術を生み出していった。アステカの彫刻家や石工・陶工・細工師たちは、きわめて広範囲にその芸術的才能を発揮し、構築的で雄渾な作品、繊細緻密で気品のある芸術品を創造していった。確かな技量と奇抜な表現感覚で古代アメリカ人の深層心理までもうかがわせ



写真9 アステカの母なる大地の女神“コアトリクエ像”。精緻な彫りの力強い石像で、別名「蛇のスカートをはいた女神」と呼ばれ恐怖の原型でもあった。コアトリクエ Coatlicue は牛と死をつかさどる神であり、天上と地上の神および人間の創造神でもあった。この女神は、手足に鋭い爪をはやした怪物が両手を広げ、頭は二匹の蛇が向かい合った異様な姿で表現されている。胴から膝には蛇の模様のスカートをはき、胸には死の象徴の頭蓋骨と心臓と掌の胸飾りをつけている。高さ2.6メートル、重さ16.5トン、1790年メキシコ市中央広場より出土。

るような、バランスよく調和した個性的な作品を数多く遺していったのである。アステカ族の社会は職業の分化がよく進んでいたが、こうした職人は社会階層の中では中級程度の地位にあり、彼らは特定の地域に居住しながら組織だった階層を形成していた。そうした職人たちの中でも優れた装身具類（首飾り・胸飾り・腕輪・鈴・冠・兜・面・楯・錫杖等々…）を製作する金属細工師や羽毛細工師たちは、王侯貴族の特権階級へ献上する高級な贅沢品や、さまざまな装飾品を提供する重要な専門家集団でもあったため、一般の平民たちよりは、かなり高い地位が与えられ非常に厚遇されていた。アステカ社会ではたとえ平民であっても、才覚があり技能や知能にすぐれ勇敢な者であれば自己が置かれている社会的な地位から抜け出して、より高い地位や名誉や富を得る機会も平等に与えられていたのである。



写真10 太陽の光を放つ“火の蛇・シウコアトル Xiuhtecuhtli”。この玄武岩製の石像は大神殿の階段のふもとか、神域の境などに置かれていたものでテノチティランから出土した。アステカ人は蛇の持つ神秘的な生命力を、精妙なリアリズムで石の彫刻の中に封じ込め、力強く重量感のある独特の芸術分野を創造していった。

8. アステカ帝国の滅亡と植民地形成

スペイン国王フェルナンドと女王イサベルに「お望みになるだけの黄金、お気にめすだけの奴隷、そして巨万の財宝を探し出し、両陛下に献上いたします」とコロンブスは、自信にあふれた約束の書状を送っていた。しかし、新大陸に到着してすでに20年がたつというのに、人々の胸をときめかし大きな期待を集めた黄金と奴隷という富を獲得するこの約束は、いっこうに果たされてはいなかった。いつまで待っても上がらない劇場の幕に、観客たちがいらだってくるように、ヨーロッパの人々は、黄金と栄光の夢物語の開幕に、ジリジリとした気持ちで待ちくたびていた。まさに、そうした状況の真ただ中に、アステカ帝国征服の一大快挙の朗報が、スペイン国王にもたらされたのである。

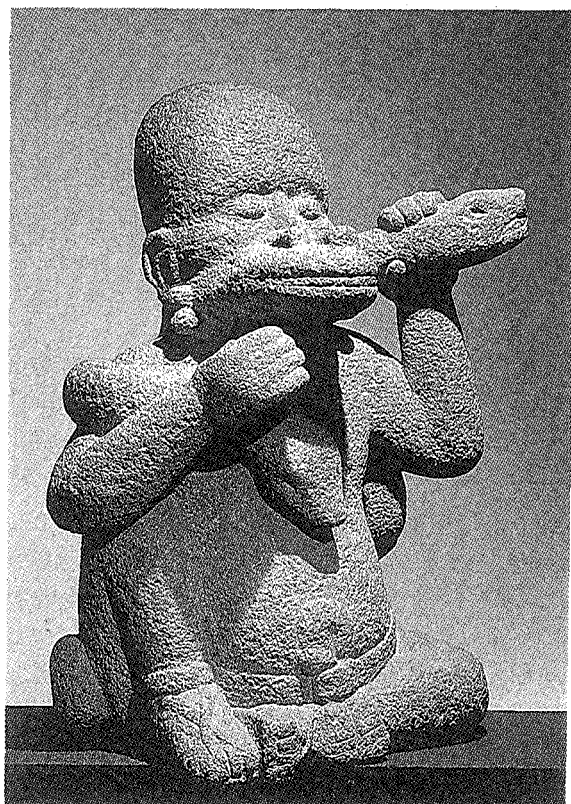


写真 11 双頭の蛇を肩に巻いた風の神“エエカトル”の座像。この石像は、風とそれにまつわる利害すべてに関係する神格“エエカトル Ehecatl =ケツアルコアトル”の像で、“風を起こす者”を示す鳥の嘴の形をしたマスクを付けている。左足を地面につけ、右足を片足立ちさせて脇腹につけ、両手をまわして背中をくねる蛇をつかんだポーズが動きと迫力を生みだし、石工職人の技量を余すところなく表現した傑作となっている。アステカ文化、後古典期後期、高さ 60 センチ、メキシコ国立人類学博物館蔵。

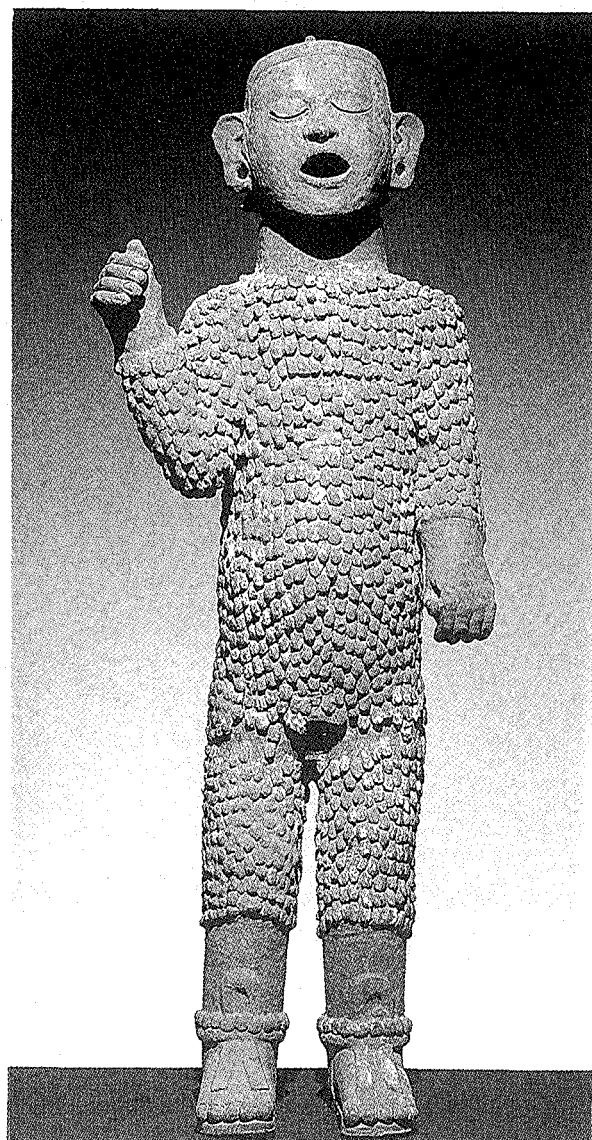


写真 12 “シペ・トテック”（金属細工師の守護神）の立像。アステカの生贄の儀式の中でも最も残酷凄惨なものの一つに、生贄として捧げられた捕虜の全身の皮膚をはぎとり、その牛皮を神の服として神官が身にまとい、観衆とともに厳粛な踊りを行うという春の神シペ・トテック Xipe Totec の祭礼がある。この土製の像はシペの生皮の服を着た人物を表現したもので、顔には皮をのばしたマスクをつけ、裏返しにした牛皮を服として胴と手足を覆っている様子を表している。この作品はアステカの職人が到達した技量の高さや土器芸術の粋を示している。後古典期後期、高さ 97 センチ、土器製、メキシコ国立人類学博物館蔵。



写真 13 鷲の兜をつけた戦士の石像。鷲は昼の天かける太陽を、ジャガーは夜の地下の世界を歩く太陽をあらわしていたが、アステカの軍隊でもっとも強大であったのが、鷲の軍団とジャガーの軍団であった。この両軍団は、太陽のふたつの側面に仕える最高位の選ばれたエリート戦士たちから成り立っていた。この石像はたくましい青年が鷲の形の兜をかぶり、その口から顔をだしている戦士の頭像で、鷲の細かい特徴と羽毛の感じを、精巧な浮彫りで巧みに表現している。この作品は、アステカ芸術の明確な様式と写実表現力を感知できる傑作となっている。後古典期後期、高さ 32 センチ、メキシコ国立人類学博物館蔵。

皇帝の座について16年目、モンテスマⅡ世は何かいいしれぬ恐怖感と、重苦しい予感に取りつかれていた。皇帝のみならず、すべてのアステカ人は、10年ほど前から不吉な前兆や予言によって、明日にでもこの世界は滅びるかもしれないとおびえ、大きな心理的不安と憂悶のなかに生きていた。1519年、首都テノチティランの夜空に巨大な彗星が現れた。ウィツィロポチトリの神殿がひとりでに炎上し雷が鳴らないのに稲妻が走った。夜な夜な女の泣き声が聞こえ「子供たちよ、この町から逃げよ」と叫んだ。何かとてつもない災いがアステカ帝国にふりかかろうとしていたのである⁽²⁴⁾。ちょうどこの年、フェルナンド・コルテスの率いるスペイン艦船がメキシコ湾岸に現れ、ベラクルスの海岸地帯に上陸した。この年はアステカの暦では「一の葦の年(セ・アカトル)」にあたり、52年目ごとにくまってくる不吉な年であった。神話によると、文化と教養の神であるケツァルコアトル Quetzalcoatl



写真14 アステカ族の石彫ショチピリの神 Xochipilli「花の王子」。この神は春・愛・踊り・詩および劇の神であり、若者たちの神＝永遠の若さのシンボルでもあった。この像は優美な曲線で表現され身体には花模様を入れ墨を施し、ジャガーの皮でつくった帯と短いマントを着用している。顔には仮面をかぶり、どこか宙を眺めているような異様に迫真力のあるリアルな彫刻である。後古典期後期、高さ77センチ。

(写真15・16・17参照) が「私は必ずこの土地に戻ってきて再び政治を支配する。その時住民たちは大へんな災厄にあうだろう」という不気味な予言を残して東の海の彼方へと姿を消した。この神の再来は、アステカ人が征服国家を造り上げるはるか昔から広くインディオの人々に信じられていたものである。

コルテスの船がメキシコ湾岸に現れた1519年、それは運命のいたずらか歴史上まれにみる偶然の一致であり、この年はまさに、ケツアルコアトルが再び帰ってくると予言されていた年であった。しかも伝説では、ケツアルコアトルは白い肌をし黒い^{ひげ}髭をたくわえているとされ、風貌のうえでも白人のコルテスたちと一致し、彼は神の再来と誤解されてしまったのである。モンテスマ王はただちに異邦人たちを丁重に出迎え、黄金の財宝を贈り物として差し出し⁽²⁵⁾、なんとかしてコルテスたちを撤退さ



写真 15 ケツアルコアトル Quetzalcoatl の碑板。
トゥーラ出土のものと考えられるこの碑板のモチーフは、鼻に棒状の飾りをつけた人間の顔であり、その顔はふたつに裂けた舌をもつ、神話的動物の口から外に出ているさまを表している。トルテカ文化、後古典期前期、61×44 センチ。



写真 16 ワステカのケツアルコアトル像。ケツアルコアトルの化身に、明けの明星、および宵の明星の二面をもつ金星がある。死と再生の二元性をもったこの星は、ケツアルコアトル神にその根本的属性を与えている。羽毛のはえた蛇神ケツアルコアトルの根本的な性格は、全智全能の神であると同時に文化神として、文化と教養を地上の人々に教え恩恵を施すことにあった。ベラクルス州テベツィントラで出土。後古典期後期、高さ 1.7×幅 1.1 メートル、石灰岩。

せようと試みた。だが、それはかえってスペイン人たちの^{どんよくしん}貪欲心をつのらせたただけであった。コルテス軍はトトナカ族とかトラスカラ族など、アステカの苛酷な統治に対抗し、反感や不満をもつ諸部族を味方につけながら、首都テノチティトランに迫った。コルテスは降伏したマヤの首長から、貢ぎ物として 20 人の女奴隷を贈られた。そのインディオたちの中に、ひときわ目立つ女でアステカの言葉ナワトル語とマヤ語の両方を自由にこなすマリンチェという聡明な美しい娘がいた。コルテスは利口な彼女が語学に堪能なのにはやく目をつけて、スペイン語を教え訓練をほどこし、有能な通訳として絶えず身边におきながら大いに利用していった。才色兼備の彼女はカトリックに改宗してドーニャ・マリーナという優雅なスペイン名をつけられ、助言者として時には相談役にもなりアステカの征服に通訳以上の重要な役目を果たしていったのである。メキシコの人々にとっては祖国を売った「裏切り者」とされる彼女は、のちにコルテスの妻となり、マルティン・コルテスという名の子供まで生んでいる。

コルテスの船隊は、船 11 隻、兵 553 名（歩兵 508 名、射手 32 名、小銃手 13 名）、水夫 100 名、大砲 14 門、馬 16 頭⁽²⁶⁾ のわずか 600 余名の、一握りにすぎないスペイン軍勢を率いていた。まだ弱冠 34 歳

だったコルテスが⁽²⁷⁾、広大なメソアメリカの諸部族とスペイン軍をはるかに凌ぐ富と、強大な軍隊を擁する軍事国家のアステカ帝国を討ち滅ぼせたのはいったいなぜなのか？ その理由としては、まず第一に、すぐれた政治家であり機を見るに敏な策略家でもあったコルテスが、アステカに反感をもつ強敵トラスカラ族やセンポアラ族などの諸部族をたくみに味方に引き入れ、同盟軍として増強しながら戦っていったほかに、アステカにはなかった騎兵や鉄砲・大砲の近代兵器を持っていたことである。また、再び帰ってくるという予言を残して987（一説には999）年にトゥーラを去った、羽毛の蛇の神ケツァルコアトルが予言どおりに再来したものと、侵略者のコルテスたちがすっかり間違えられてしまったことである。こうしたことのほかにも前述のように、モンテスマ王は最高位の神官であり同時に最高の技術を持った占星術師でもあった。アステカの貴族たちの中にはスペイン人を迎え入れることに反対し警告する者もいたが、宗教が軍事に対して絶対的な優位にあったアステカ世界では、モンテスマ王の決定したことは神の意志であり、スペイン人に反対する好戦論者も強くさからうことはできなかったことである。さらには、1511年にジャマイカ沖で船が難破して、ユカタンに漂着したスペイン人のアギラールという男がコルテスの通訳となって活躍し、その上に、前述のマリンチェの出現といった、幸運な偶然の一致や出来事がいくつも積み重なり合ったことなどがあった。

コルテスは皇帝のモンテスマⅡ世⁽²⁸⁾に会見の要求を突き付けた。没落の予感と打ち消しがたい死と滅亡の宿命論にとらわれていた皇帝は、ケツァルコアトル神の予言の復讐^{ふくしゅう}の時が来たのだと、抵抗する気力もうせ運命に忍従するよりほかになかった。このコルテスの要求を神の言葉と考え、拒絶することができず、逆に「あなた様をお待ちしておりました。心から歓迎申し上げます」とコルテスたち一行を簡単に首都テノチティランに迎え入れてしまったのである。そして、ついには囚われの身となり傀儡^{かいらい}として幽閉監禁され、悲劇的な最期を遂げたのである。しかしそれでもアステカは、後を継いだ新しい皇帝クワウテモクのもとに蜂起し、1年余りにわたって果敢に激しい反撃を試みた。そして、幾多の激しい攻防と変転の末、ついに1521年8月13日、テノチティランはコルテス軍の手に落ち、太陽の帝国アステカは永遠に地上から抹殺されてしまったのである。このように、皇帝モンテスマⅡ世が君臨するアステカ帝国は、まだ繁栄と興隆途上の真ただ中にあり、いぜんとして領土拡張をめざしていたときに突然滅ぼされてしまったのである。アステカ崩壊以後、スペイン人の関心は一挙にアメリカ新大陸に向けられ、スペイン王室にとって重要な上ない植民地として形成されていくのである。

こうしてアステカが征服された後、都市の建設はひと続きの事業として各地に急激に展開されていった。1521年にはテノチティランの廃墟の上にスペイン人の都市自治体メキシコ市が建設され、1524年にはコルテスの部下のアルバラードがチャパス・グアテマラ高地のマヤ系先住民族を征服しグアテマラ市を建てた。また、同様にコルテスの部下であったモンテホは1542年にユカタンのマヤ族を制圧してメリダ市を、さらにコルドバは1523～24年にニカラグアへ進出して、グラナダ市とレオン市を建てた。このようにアステカの滅亡から10数年足らずの間に、スペインの征服者と開拓者たちによってメソアメリカの広範囲に新しい都市建設の波紋が広がっていった。とてつもなく広大な領土を手にしたスペイン王室は、メキシコを「ヌエバ・エスパーニャ」と名付け新総督として「副王」を置いて統治させ、強力な王権確立を推進していったのである。コルテスによるアステカ帝国征服は、世界の歴史もっともドラマチックで大胆な活躍の一つに数えられる。だがその11年足らず後には、この手柄と榮譽をさらに上回る大仕事で、同じスペイン人の征服者フランシスコ・ピサロによって成し遂げら



写真 17 テオティワカン、ケツアルコアトル神殿の“羽毛で覆われた蛇神の頭部”。常に善神のケツアルコアトルは雨や水を支配すると同時に、人間に農耕や文化、学問や宗教上の知識などを教えた文化神として、テオティワカン以後の後世の諸文化にまで長く受け継がれていった。この神殿はテオティワカン文化の中でも、もっとも装飾ゆたかな建物であり、紀元 200 年頃までに完成されたといわれる。

れた。しかも彼は、アステカよりさらに強固な官僚制度と確立された政治・社会組織、統制経済、勇猛果敢で強大な軍隊や高度な土木技術を誇ったインカ帝国を、コルテス軍の半分にもみたくない数百人の軍勢で征服をやったのけたのである。

これまでアステカ文明の宗教や芸術を中心に、メソアメリカ地域の古代文明の謎や魅力を探ってきた。古代人の卓越した創造力と自由奔放で奇抜な表現力は、現代社会の常識や尺度では到底はかり知れない、深い神秘性と意表をつく迫力にみちている。そして、底知れぬ魅力とロマンにもあふれている。今では草むす礎石のみを遺す遺跡や廃墟も、失われたかつての人間の生活の場であり、そこには遠い過去に生きた人間たちの栄枯盛衰の名残りとはさまざまな痕跡や記録が潜み眠っている。論考を進めながら、往時のインディオの人々の笑いや話し声、息遣い、さんざめきなど日常の喜怒哀楽の様子がふと間近に聞こえてくるような錯覚にしばしばとらわれてしまった。マヤ人もアステカ人も、現代人以上にこの地球の破滅と荒廃を恐れ、不安の中で宗教に救いを求める生活をしていた。物質文化と精神文化のアンバランスがますます溝を深めている今こそ、私たちは生存と破滅の真の意味を問わなければならない時であろう。徐々に風化され、再び大自然の懷に舞い戻っていきつつある古代アメリカの遺跡は、現代文明人にいったい何を訴えかけているのであろうか。 (未完)

註 I

- (1) 『大英博物館第6集〈太陽の帝国の滅亡—アステカ・謎の仮面を追う—〉』NHK、1991年5月1日放送より。
- (2) 『アステカ文明展図録〈メキシコ高原に栄えた太陽の国、湖上都市興亡の壮大なドラマ〉』朝日新聞社、1974年、1頁。
- (3) メアリ・ミラー／カール・タウベ編／武井摩利訳『マヤ・アステカ神話宗教事典』東洋書林、2000年、38頁。
- (4) 葛西 崇、「古代マヤ文明の興亡 (一) —マヤの世界と宗教芸術を、パレンケの遺跡を中心に探る—」、『香川大学教育学部研究報告』(第I部第110号)、2000年、47-48頁。
- (5) 「アステカ」という言い方について、モーリス・コリスは『コルテス征略誌〈黄金の帝王モンテスマの最期〉』の中で次のように記している。「…彼ら自身の言語であるナワトル語では、あの民族はみずからメキシカと名乗った。同時代のスペインの著述家もこの言葉を「メキシコの」といったふうに用いている。ナワトル語では「アステカ」とは言わない。これは征服後、ヨーロッパ人が命名したもので、疑わしい価値しかない。いまこそあのいい方をやめるべきだ。
- (6) 狩野千秋『マヤとアステカ』近藤出版社、1983年、248頁。
- (7) 前掲書(6)に同じ、253頁。
- (8) モーリス・コリス／金森誠也訳『コルテス征略誌〈黄金の帝王モンテスマの最期〉』大陸書房、1976年、58頁。
- (9) 高山智博『アステカ文明の謎〈いけにえの祭り〉』(講談社現代新書390)、講談社、1980年、168-169頁。
- (10) 前掲書(6)に同じ、321頁。
- (11) キチュー・マヤの現存する最も重要な「神聖な書物」で、必要欠くべからざる最古の文献資料の一つである。『ポ波尔・ヴフ Popol-Vuh』は、『評議会の書』の意味で、日本のちょうど『古事記』やヘブライ人の『旧約聖書』にあたる大変貴重なものである。天地万物の創造に始まり、キチュー族諸代の王家を中心とした歴史をたどり、現世の人間以前の世界に活躍した神々と巨人や悪魔などの争いの物語をはさんだものである。マヤの宇宙観に見る「歴史哲学」でもあった『ポ波尔・ヴフ』は、神話と歴史が渾然とした一連の統合をしめしている。マヤの文化に興味を抱いた宣教師らにより収集保存されてきたもので、先スペイン期のマヤの歴史・文化・信仰のすべてを理解するために不可欠の貴重な第一級の学術資料でもある。
- (12) 前掲書(4)に同じ、49頁。
- (13) 増田義郎編集・解説『アステカとインカ〈アメリカ大陸の古代国家〉』(現代のエスプリNo125)、至文堂、1977年、100頁。
- (14) 前掲書(13)に同じ、70頁。
- (15) ヴィクター・W・フォン・ハーゲン／浜 洋訳『エル・ドラード〈大アマゾン黄金伝説〉』大陸書房、1976年、24-26頁。
- (16) 前掲書(2)に同じ。
- (17) 前掲書(13)に同じ、63頁。

- (18) 前掲書 (6) に同じ、265 頁。
- (19) 前掲書 (2) に同じ。
- (20) ソフィー・D・コウ／マイケル・D・コウ／樋口幸子訳『チョコレートの歴史』河出書房新社、1999 年、118 頁。
- (21) 『リーダーズダイジェスト』(第 38 巻第 2 号)、日本リーダーズダイジェスト社、1983 年、8-9 頁。
- (22) 増田義郎『古代アステカ王国 〈征服された黄金の国〉』中央公論社、1973 年、80 頁。
- (23) 前掲書 (13) に同じ、80 頁。
- (24) 前掲書 (2) に同じ。
- (25) 「モンテスマ II 世からコルテスに献上された金や宝石の首飾りは 183 個のエメラルドと 232 個のガーネットで飾られていた」、ジャック・スーステル／狩野千秋訳『アステカ文明』白水社、1971 年、117 頁より。
- (26) 前掲書 (8) に同じ、39 頁。
- (27) ベルナル・ディアスは 1518 年のコルテス像について、彼が当時どのような活動をしていたか簡潔な筆致で次のように書いている。「彼は背の高い男で均整がよくとれており、力強かった。彼の顔色は灰色じみて、青白かった。彼の目つきはまじめであったが、やさしさがなければならなかった。毛髪とあごひげは黒く、少なかった。彼はやや、やせすぎであったものの胸と肩幅は広く、いくらか湾曲した脚をしていた。乗馬や剣術はきわめて巧みであった。しかしとくに彼は、なによりも大切な勇気と、進取の気性をもっていた。若いときには、彼はイスパニョーラで、女たちを相手にいくらか軽薄な生活をおくり、何度も、強くてすばしこい男たちと闘っては、つねに勝利をおさめていた。彼は下唇のところにナイフで切られた傷あとをもっていた。これがじろじろみつめられそうなので、彼はあごひげで、一部をかくそうとつとめた。友人との交際では、彼はきわめて思いやりがあり、ラテン語をよくし、いくらかの詩作もした。毎朝、彼は時禱書の祈りのことばを述べ、敬虔なようすで、ミサに参列した。彼はトランプやサイコロのあそびが好きであったが、とくに女たちを愛した」モーリス・コリス／金森誠也訳『コルテス征略誌 〈黄金の帝王モンテスマの最期〉』大陸書房、1976 年、30-31 頁より。
- (28) 「モンテスマはそのとき 52 歳だったが、ベルナル・ディアスは、年のころ 40、と記している。若く見えたのだろう。ベルナルの描写によれば、均整がとれて美しい体軀をし、やせ型。色はあまり黒くなく、髪を耳のへんまでたらしめているが、ヒゲはすくない。顔つきは面長で、明るい感じ。眼は美しく柔和だったが、時によっては重々しくいかめしい光をたたえる。毎日午後一度入浴するので、たいそう清潔にしている」増田義郎『古代アステカ王国 〈征服された黄金の国〉』中央公論社、1973 年、124-125 頁より。

註Ⅱ 引用図版及び写真

- 図 1 メソアメリカの地域区分と主要遺跡分布図。『メキシコ国立美術館 〈世界の美術館 34〉』講談社、1969 年、181 頁。
- 図 2 アステカ帝国の勢力範囲図 1520 年。増田義郎編集・解説『アステカとインカ 〈アメリカ大陸の古代国家〉』(現代のエスプリ No.125)、至文堂、1977 年、71 頁。

- 図3 アステカの人身供犠の儀式。ジョナサン・ノートン・レオナード／泉靖一監修『古代アメリカ』(ライフ人間世界史17)、タイムライフブックス、1981年、160-161頁。
- 図4 アステカの征服者フェルナンド・コルテス像。ジョナサン・ノートン・レオナード／泉靖一監修『古代アメリカ』(ライフ人間世界史17)、タイムライフブックス、1981年、143頁。
- 図5 アステカ式の蒸し風呂“テマスカリ”。ジョナサン・ノートン・レオナード／泉靖一監修『古代アメリカ』(ライフ人間世界史17)、タイムライフブックス、1981年、158-159頁。
- 図6 偉大なアステカの皇帝、モンテスマⅡ世(在位1502-20年)の肖像。ノーマン・コルパス／葛野友太郎訳『チョコレートーロマンのあるスイートー』モロゾフ株式会社、1981年、14頁。
- 図7 カカオの木“神々の食物の木”を詳細に描いたイギリスの植物図鑑。ノーマン・コルパス／葛野友太郎訳『チョコレートーロマンのあるスイートー』モロゾフ株式会社、1981年、35頁。
- 写真1 アステカ帝国の首都テノチティトランを俯瞰した全貌図。『アステカ文明展図録〈メキシコ高原に栄えた太陽の国、湖上都市興亡の壮大なドラマ〉』朝日新聞社、1974年、1頁。
- 写真2 復元されたアステカ帝国の首都“テノチティトランの大ピラミッド付近の模型”。ナイジェル・デーヴィス／中島俊哉訳『古代アメリカ文明の謎〈コロンブス以前のアメリカ大陸〉』佑学社、1980年、49頁。
- 写真3 トウーラの「軍装に身を固めた戦士の巨石柱像」。『メキシコ国立美術館〈世界の美術館34〉』講談社、1969年、45頁。
- 写真4 戦士の石像。『古代メキシコ至宝展 図録』毎日新聞社、1992年、32頁。
- 写真5 雨の神“トラロック”の彩色土偶。『古代メキシコ至宝展 図録』毎日新聞社、1992年、30頁。
- 写真6 復元された“トラテロルコの市場”の模型。増田義郎編『メキシコ国立人類学博物館〈世界の博物館5〉』講談社、1978年、77頁。
- 写真7 ディエゴ・リベラが描いた「メキシコの歴史“偉大なテノチティトラン”」の壁画。コンスタンチノ・レイズ・バレリオ写真『メキシコ芸術』The Hamlyn Group Limited、1967年、48頁。
- 写真8 アステカの“太陽の暦石”。コンスタンチノ・レイズ・バレリオ写真『メキシコ芸術』The Hamlyn Group Limited、1967年、24頁。
- 写真9 アステカの母なる大地の女神“コアトリクエ像”。コンスタンチノ・レイズ・バレリオ写真『メキシコ芸術』The Hamlyn Group Limited、1967年、25頁。
- 写真10 太陽の光を放つ“火の蛇・シウコアトル”。増田義郎編『メキシコ国立人類学博物館〈世界の博物館5〉』講談社、1978年、82頁。
- 写真11 双頭の蛇を肩に巻いた風の神“エエカトル”の座像。『古代メキシコ至宝展 図録』毎日新聞社、1992年、43頁。
- 写真12 “シペ・トテック”(金属細工師の守護神)の立像。『古代メキシコ至宝展 図録』毎日新聞社、1992年、46頁。
- 写真13 鷲の兜をつけた戦士の石像。『古代メキシコ至宝展 図録』毎日新聞社、1992年、36頁。
- 写真14 アステカ族の石彫ショチピリの神「花の王子」。『メキシコ国立美術館〈世界の美術館34〉』講談社、1969年、53頁。
- 写真15 ケツアルコアトルの碑板。『原色世界の美術館第16巻〈メキシコ・ペルー国立人類学博物館ほか〉』小学館、1971年、27頁。

写真16 ワステカのケツアルコアトル像。増田義郎編『メキシコ国立人類学博物館〈世界の博物館5〉』講談社、1978年、60頁。

写真17 テオティワカン、ケツアルコアトル神殿の“羽毛で覆われた蛇神の頭部”。コンスタンチノ・レイズ・バレリオ写真『メキシコ芸術』The Hamlyn Group Limited、1967年、22頁。

〔付記〕

以上に掲げた本論稿での図版や写真の転載使用について、快くご許可いただいた各出版社・新聞社等には、記して深甚の謝意を表したい。

参考文献

- 狩野千秋『マヤとアステカ』近藤出版社、1983年
- 増田義郎『古代アステカ王国〈征服された黄金の国〉』中央公論社、1973年
- 増田義郎編集・解説『アステカとインカ〈アメリカ大陸の古代国家〉』（現代のエスプリNo.125）、至文堂、1977年
- 高橋均／網野徹哉『ラテンアメリカ文明の興亡』（世界の歴史18）、中央公論社、1997年
- ベルナール・ディーアス・デル・カスティージョ／小林一宏訳『メキシコ征服記（一）（三）』（大航海時代叢書エクストラ・シリーズ）、岩波書店、1986年、1987年
- メアリ・ミラー／カール・タウベ編／武井摩利訳『マヤ・アステカ神話宗教事典』東洋書林、2000年
- セルジュ・グリュジンスキ『アステカ王国〈文明の死と再生〉』（「知の再発見」双書19）、創元社、1996年
- ソフィー・D・コウ／マイケル・D・コウ／樋口幸子訳『チョコレートの歴史』河出書房新社、1999年
- ジャック・スーステル／狩野千秋訳『アステカ文明』（文庫クセジュ648）、白水社、1971年
- レンゾ・ロッシ／ダニエラ・ザニン／サラ・カセッリ『マヤ・アステカ・インカ文明〈ニュートンムック・古代遺跡シリーズ〉』教育社、1997年
- 『アステカ文明展図録〈メキシコ高原に栄えた太陽の国、湖上都市興亡の壮大なドラマ〉』朝日新聞社、1974年
- ノーマン・コルパス／葛野友太郎訳『チョコレートーロマンのあるスイートー』モロゾフ株式会社、1981年
- モーリス・コリス／金森誠也訳『コルテス征略誌〈黄金の帝王モンテスマの最期〉』大陸書房、1976年
- 『古代メキシコ至宝展 図録』毎日新聞社、1992年
- 増田義郎『大航海時代』講談社、1984年
- 狩野千秋『中南米の古代都市文明』同成社、1990年
- 高山智博『アステカ文明の謎〈いけにえの祭り〉』（講談社現代新書390）、講談社、1980年
- 吉村作治『マヤ・アステカ 太陽の文明〈文明探険3〉』平凡社、1998年
- 大井邦明／加茂雄三『ラテンアメリカ』朝日新聞社、1992年
- 大井邦明『ピラミッド神殿発掘記（メキシコ古代文明への誘い）』朝日新聞社、1985年

- 国本伊代／畑恵子／細野昭雄『概説メキシコ史』有斐閣、1984
- 木貫良夫他『遺跡の旅〈NHK未来への遺産姉妹編3／マヤ・アステカ・インカ〉』学習研究社、1976年
- C・W・ツェーラム／村田数之亮訳『神・墓・学者』中央公論社、1973年
- G・H・Sブシュネル／増田義郎訳『最初のアメリカー人』創元社、1971年
- ジョナサン・ノートン・レオナード／泉靖一監修『古代アメリカ』（ライフ人間世界史17）、タイムライフブックス、1981年
- ヴィクター・W・フォン・ハーゲン／浜 洋訳『エル・ドラード〈大アマゾン黄金伝説〉』大陸書房、1976年
- ジャン・ピエール・ヴェルデ／唐牛幸子訳『天文不思議集』（「知の再発見」双書09）、創元社、1996年
- カーネギー研究所／小泉源太郎訳『幻のアステカ王国〈栄光のメキシコ古代文明の謎〉』大陸書房、1974年
- ナイジェル・デーヴィス／中島俊哉訳『古代アメリカ文明の謎〈コロンブス以前のアメリカ大陸〉』佑学社、1980年
- シャーリー・ゴレンスティン／田口実訳『メキシコ古代文化の謎と遺産〈マヤ・トルテカ・アステカ文化の神秘〉』佑学社、1976年
- マリアンヌ＝マン＝ロ／染田秀藤訳『イスパノアメリカの征服』（文庫クセジュ665）、1984年
- ミゲルレオン・ポルティエヤ／山崎真次訳『古代のメキシコ人』早稲田大学出版部、1985年
- ル・クレジオリ原訳・序／望月芳郎訳『チチメカ神話〈ミチョアカン報告書〉』新潮社、1987年
- B・グリヤエフ／中山一郎訳『中米古代文明の謎』大陸書房、1973年
- A・コンドラトフ／中山一郎訳『沈黙の古代文明』大陸書房、1973年
- R・シルヴァバグ／三浦一郎・清水昭次訳『埋れた古代文明』法政大学出版局、1969年
- 吉野三郎『マヤとアステカ〈中米古文化物語〉』（現代教養文庫435）、社会思想社、1980年
- 染田秀藤『ラス・カサス伝〈新世界征服の審問者〉』岩波書店、1990年
- チャールズ・ベルリッツ／小江慶雄・小林茂訳『謎の古代文明』紀国屋書店、1975年
- 増田義郎編『メキシコ国立人類学博物館〈世界の博物館5〉』講談社、1978年
- 増田義郎／藤井龍彦他『古代アメリカの遺産〈新潮古代美術館14〉』新潮社、1981年
- 増田義郎『太陽と月の神殿〈沈黙の世界史12〉』新潮社、1972年
- 増田義郎『神と黄金と栄光と〈図説探険の世界史3〉』集英社、1975年
- 増田義郎『古代アメリカ美術〈大系世界の美術7〉』学習研究社、1973年
- 大貫良夫編『モンゴロイドの地球5〈最初のアメリカー人〉』東京大学出版会、1995年
- イグナシオ・ベルナル／寺田和夫／大貫良夫他『原色世界の美術館第16巻〈メキシコ・ペルー国立人類学博物館ほか〉』小学館、1971年